
新異世界旅しちゃいまーす！！！！

ALONE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新異世界旅しちやいまーす!!!

【Nコード】

N3384V

【作者名】

ALONE

【あらすじ】

おつすオラ神崎啓！まあ前もこのフレーズやったよな！

えーHAZUKIの馬鹿がアカウントを消したので新しいのを投稿する！という感じでこの小説が投稿された。緋弾のエリアは超不定期更新になって主にこちらの更新をしていくのであしからず

では楽しんで行ってくれ！

第一話 全ての始まりは人助けから！（前書き）

久しぶりと言っておこう！！！

この小説はフィクションだ！実際にある団体、学校等とは一切関係ないのであしからず！！

それとこれは原作ブレイクと言う物騒極まりないモノである。「おいおい原作ブレイクとか馬鹿じゃねえの？」とか思うならばすぐ引き返した方がいい！

それでも読んでやる、読んだ上げるわよ！べ、別にあんたの（ry などというツンツンデレデレな奴なら読んでほしい。では本編だ！

第一話 全ての始まりは人助けから！

「あ、起きましたか？」

「……………」

突然だが初めまして神崎啓だ。画面の目の前で見ている皆さんはこの状況に戸惑っているだろうが大丈夫だ、俺も把握してないから

一応周りを確認する。どこまでも白い空間。っていつか距離って言う概念が無いって感じがする

そして目の前には男どもが見たら騒ぎそつな絶世の美人さん

「あの一どちら様？」

「え！？えつと私はアテナと申します」

アテナ・・・ああアテナ戦女神と言われている神で父はゼウスだったかな？

って思いだしてる場合じゃねえだろ！？

「はあ！？アテナって神様だろ！？実在してんのかよ！っていつか何でおれの目の前に！？」

「それはそのお…………ごめんなさい！！！」

アテナ・・・様付けした方がいいか。アテナ様はなんかごめんなさいと言って突然土下座してきた何故に？

「えつと貴方はここに来る前のことを覚えていますか？」

「あ？ええつと・・・学校の帰りいつもどおりスーパーで買い物して・・・確か・・・」

「あーたくさん買いすぎたな・・・」

俺の手にぶらさがっているのはたくさんの野菜やらなんやらが詰まっているスーパーの袋。はっきり言って重い・・・

「まあ多めに作ってあいつの墓に持って行って」

ふと視線を横にすると道路に小さな女の子が泣いていた。しかも後ろから迫るのは居眠り運転上等なトラック

「おおい！？何だそのテンプレな展開はああああ！！！！」

俺は袋を捨てて女の子に駆け寄り突き飛ばして歩道に入ったのを見て凄いい衝撃に襲われ意識が無くなった

「思い出したあ！！っていつかあんな衝撃に襲われて俺生きてたのか……」

「いや、現実逃避しないで下さいよ……。ここはどう見ても生きている人が来れる場所ではないですよ？」

うるさい。そりゃあ現実逃避ぐらいするわ！！いきなり死んだことを認識できるわけないだろ！？

「ですが……すみません。貴方が死んだことは私達の不手際です」

「……あんだと？」

「本来ならあの少女はあそこにはいないはずの運命だったのです。それが何故かあそこに……。しかもそこに貴方が偶然居合わせるなんて……」

「そう……なのか」

そうか……。俺は本当に死んだんだな……

「本当にすみませんでした……」

アテナはふかぶかと頭を下げた

俺はそれを見て一つ気になったことがあった

「あの女の子は・・・」

「はい？」

「あの女の子は助かったのか？」

俺が尋ねるとアテネはびっくりした顔をして次に慌てて返事をする

「は、はい！それは貴方のおかげであの子は助かりましたよ？」

「そっか・・・ならいいかな。俺は最後を人助けで死ねたんだから」

「・・・・・・」

「あ？何だよ」

「いえ・・・貴方のような人を見るのはずいぶん久しぶりです。人はやさしくしていてもどこか打算で生きていますから」

「いや、俺だつて打算で生きてるぞ？今だつて最後は人助けで死んだんだから天国がいいなとか考えてるからな」

俺の気持ちを言うとアテネは嬉しそうに笑顔になる

何でだ？

「何でだ？顔してますね。嬉しいんです。あの人達の子供がこんな・・・」

「あ？」

「……いえ、何でもありません。とりあえず本当にすみませんでした。そこで何ですが……」

「ん？何だよ？」

「貴方に転生する権利があります。私が貴方の願いを出来るだけ叶えて転生させてあげます」

「あ？転生？……元の世界には無理なのか？」

「それは……無理です。輪廻転生、人の魂は死ぬと祖霊と呼ばれる人の礎となったものに返ります。それを無理やり転生させるんです……無理です、ごめんなさい」

「そっか……じゃあ……リリカルなのは世界にしてくれ」

「リリカルなのは？ああ、あの世界ですか……」

あのアニメはダチが一押ししてたしな。面白そうだし

アテナは何か色々確認した後頷いた

「わかりました。願いは、それだけですか？」

「あー……んじゃあ、あそこの世界に関する最高の技術を教えてください。それだけでいい」

「わかりました。あの世界に関する最高の技術を転生した後は何らかの方法で教えます」

ん？何かお互いに認識の齟齬がある感じが・・・大丈夫か？

「あ、ああ。頼む」

「では、行ってらっしゃい」

パチン！とアテナが指をはじくと俺の後ろに扉が出現した

「おお、神様っばい」

「今まで信じてなかったんですか!？」

「いやあそれっぽくなかったからなあ・・・」

「もう！それでは・・・もう会うことはないでしょう」

アテナがそう言うとは何か感傷的なものがつづいた。何だろう・・・俺はこの光景を見たことがある・・・？

本当に行くのですか・・・？

ああ、俺はあいつと・・・あいつと一緒に居たいんだ。今までありがとうなアテナ

「・・・さようなら」

・・・ああ、さようならアテナ、我が同胞

「うー!？」

「啓!?!どうしたんですか!?!」

今のは……何だ?

「あ、ああ。大丈夫だ。ありがとうなアテナ」

「っ!?!い、いえ……」

俺は立ち上がり扉を開け……るところでアテナに振り返る

「さよなら、アテナ」

「　　っ!?!さ、さようなら、　　アルク」

アルク?俺は聞き返そうとしたところで意識が闇に飲まれた

第一話 全ての始まりは人助けから！（後書き）

作「ALONEと！」

啓「神崎啓のー！」

作・啓「あとがきこ〜な〜！」

作「さて始まりましたおなつかしのあとがきこ〜な〜！」

啓「みんな、久しぶりだな！帰ってきたチート野郎こと神崎啓だ！」

作「はいはいー！皆さんお久しぶりです！HAZUKI改めALONEと申します！この小説は前とは少し違って啓のチートが少し弱くなります」

啓「そうなんですよ。それと明かされていない俺の過去も少し改変するっていうか出てくる人物を増やします！」

作「それでも良いという方は次話もお楽しみにしてくれる・・・とありがたいなーと思います！」

作・啓「ではまた次回！」

第二話 いやあ過去に飛ばされるとは・・・アテナめ覚えてるよ(怒)(前書)

二話

第二話 いやぁ過去に飛ばされるとは……アテナめ覚えてるよ(怒)

「あ、気が付きましたか？」

「……………は？」

……デジャヴな感じだが一応アテナと会った空間じゃない。森に
囲まれ、芝生の上で俺は寝てる状態だ

そして目の前には赤と緑のオッドアイの十七、八歳ぐらいの女の子
が俺を見下ろしていた

「俺は……………」

「貴方ここで倒れていたんですよ？どこか怪我でもしていたんです
か？」

「ん？ん……………昼寝をしていたんだ。良い天気だからな」

咄嗟に嘘をついてしまったがこんな良い天気でしかも木陰だ怪しま
れないだろう

状況を確認する。転生は無事完了したみたいだ。でもここが本当に
リリカルなのは世界かどうかを確認するのは難しい

しかも現代に赤と緑のオッドアイの少女何かいるか？

「昼寝ですか……良いですね。私はここには鍛錬で来たのですが・
……邪魔でしたね」

「あ？鍛錬？お前こんなところに鍛錬しに来たのか？」

「え？え、ええまあ」

？何か俺へんなこと言ったか？何故そんな驚いた顔をする。しかも鍛錬……ますます現代か怪しい

「あの貴方名前は？」

「あ？俺？俺は……って言うんだ……っては？」

「？どうかしたんですか？」

名前が言えない……まさかアレか？前世で使った名前は使えませんが……せんって言うお約束なあれか！？面倒な……ええつとお……

「アルク、アルクエイド・フォルター。よろしく」

ぐおおおお！？何だその厨二みたいな名前は！？何か目の前の少女が外国人ぽかったから外国人ツぽい名前にしてみたんだが恥ずかしい……

「アルクエイド……良い名です。私は知ってるかもしれませんがオリヴィエ・ゼーゲブレヒト宜しくお願いします」

ペコリと腰を曲げて挨拶をするオリヴィエ。

いやぁ綺麗な子だよなあ……

「よろしくなオリヴィエ」

「.....」

「ん？何だポカーンとして。俺なんか変なこと言ったか？」

「い、いえ！そんなことは！ですが.....」

さつきから何で言い淀むんだ？さつきもそうだし.....

俺は身を起して少女と目線を合わせる。この目線の高さからしてだいたい歳は十七〜十九歳ぐらいか。容姿とかどんな風になってんだろ

「民は私に敬語しか使いません。ですから貴方のような人が珍しくて.....」

「ん？何で敬語を使うんだ？お前唯の女の子だろ？」

「.....何を言ってるんですか？貴方はベルカに住んでるんでしょっ？」

「ベルカ？どこだそこは？海鳴市って場所だろ？」

「.....貴方もしかして.....次元漂流者？」

はい？何ですかそれ

次元漂流者、次元震と呼ばれる次元規模の地震で、それで時たま次元の穴が発生してどこか別の時空に飛ばされると言うはた迷惑なものらしい。つまり次元漂流者とは次元規模の迷子なわけです

「……この年になって迷子とか……」

俺は説明を聞くと膝をつく

情けない……自分の正確な歳はわからないがさっきも言った通り歳は絶対十代後半だ。それが迷子って……

「ア、アルク落ち込まないでください！次元震は誰にも予測できません。アレを回避することは極めて難しいのです」

そうなのか……でもそれでもこの歳になって迷子は情けない

「とりあえず……世界がたぶん違うからここはなんていう場所だ？」

「ここはベルカと呼ばれる世界です。その中でも三大国と呼ばれる国の一つアヴァロン。そして私はその女王。人からは聖王女と呼ばれています」

ジヨウオウ？変な役職だな……女王！？しかも聖王女！？おいおいまさかここは……ダチが言っていたリリカルなのは三期で出てくるヴィヴィオとかいう子供の母親的な感じの人物だったか？しかもその人は本編の300年前の……

「ところでアルク、貴方はどんな世界から来たのですか？」

「俺？俺の世界は・・・魔法が無い世界だな」

「魔法が無い！？で、ではどうやって暮らしていたのですか!？」

「魔法っていう技術の代わりに科学っていう技術が発展してたんだ。科学はえつと電気っていう自然のエネルギーを利用して何かを動かしたり石油っていう原料を燃やして動かしたりとか。何かを混ぜ合わせて別の何かを作るとかそんな技術だ」

「ほう、すごいんですね、そのカガクというものは・・・」

「魔法の代わりに使っていたものだからなあ・・・。俺から言ってお前達が使っている魔法の方が凄いと思うぞ？」

「そうですか？」

オリヴィエは首をかしげる

「俺たちが使っている石油とかは有限なんだ。だから俺が暮らしていた時代は石油が無くなりそうだとか騒いでいた。それに比べて魔力は人から生成されるものだから無限だ。それは凄いことじゃないか？」

「確かに・・・生まれた時から使っていたものだからね・・・。案外分かっているようでわかっていなかったのかもしれない。ところでアルクは何か武芸でもやっていたんですか？」

「？何でだ？」

武芸・・・武術はやってきた。俺は自分で流派を造つたのだ。生前俺は天才児として世界に知られていた。世界中が俺を欲しがった。でもそんな生活が嫌で俺は自分の経歴を消してあの学校に入った。そこからは楽しい毎日だったなあ・・・

「貴方からは武人の感じがします。しかも物凄い使い手の感じが」

「・・・お前凄いな・・・」

「ん？そうですか？」

気配とか足遣いとかは気にしてただけだなあ・・・それでも達人にはわかつちまうか

「俺が武人だったらどうする？」

「鍛錬に付き合っしてほしいです」

率直ですね、女王様

「んー・・・まあいいか。でも俺は魔法は使えない魔法を使わないで戦えるか？」

「もちろんです。私は魔法を使わないで極力鍛錬していますから」

そりゃあ結構

俺はそこらへんから木の棒を拾う

「ナイフ……はないか。何か切れるモノないか？」

「アイリス……あ、そう言えばアイリスの紹介を忘れていました」

「アイリス？」

オリヴィエは手首からブレスレットを外し掌に乗せる

「アイリス、挨拶をなさい」

《はい、マスター。初めましてアルク様。私はインテリジェントデバイス「アイリス」と申します》

「へえこれが……」

インテリジェントデバイス。この世界の魔法は機械に頼るらしい。魔法少女が使う杖が機械と思ってくれればいい

その中でも自意識がある機械。つまりAIが組み込まれているデバイスがインテリジェントデバイスだ

ん？何で俺こんなに詳しいんだ？リリカルなのは事は全然知らないはずなんだが……

「よろしくなアイリス」

《はい》

「アイリス、ソードになれますか？」

《なれますよ？ですが何故ですか？》

「アルクが必要だと言ってるの。お願いします」

《わかりました。では・・・》

アイリスが変形して剣になる

「よし。この木の棒を・・・ほっ！」

木の棒を投げて斬り裂いて地面に着くころには・・・

「木刀の完成！」

出来上がりを見る。材質はかなり硬い木の棒を選んできたから問題ない。けどあんなに堅い木の棒でもスツと斬れたんだが・・・すごいねデバイス

「それは・・・何ですか？」

「木刀って言う模擬戦をやるときに使う武器さ」

「不思議な形をしていますね。それはなんていう剣なのですか？」

「刀。日本刀っていうんだ」

「カタナ・・・よさそうな武器ですね」

オリヴィエは拳に防具を付けて構える

徒手空拳か・・・雰囲気でわかる。かなりの達人だ・・・まっそれでも負けるきはないけどな！

「行きます！」

「来い！」

カァン！箆手と木刀がぶつかると乾いた音が鳴る

「ハア！！！」

「シッ！」

カァン！カァンカァンカァン！！カァン！

ガ！バキ！ビビッ！

打ち合い蹴り合いそろそろお互いが付かれてきたころ

「ハアハア・・・やりますね・・・」

「はあっ！・・・お前もな」

結構本気で打ち合ったのに一本もダメージになつてない。腕か足に全部防がれてる。これで魔法を使われたらかなわないぞ・・・

俺は木刀を腰だめに構え、精神集中する

「……………何か仕掛けてくる気ですね」

オリヴィエも拳を構え迎撃たい背に入る

「零式壱ノ太刀「閃花」！」

ヒュン　　！

「っ！？消え　　」

ドスウ！

「ぐっ！？」

「俺の　　勝ちだ」

深く入っている俺の木刀を見てオリヴィエは苦しそうにでも確かな嬉しそうな笑顔で笑った

「アルクは強いんですね！」

「お前も十分強かったぞ。はっきり言ってあそこまで打ち合つとは思わなかった」

女の子だし五分打ち合えば良い方だと思ってたんだがまったくの

見誤りだった

まさか「技」まで使うなんてなあ。「閃花」閃光のように散る花を再現しようとして作った技だ。イメージ通り人には知覚できないスピードで動く。もちろん気を使ってな

「センカとはなんですか？」

「俺の剣術だ。まあ我流だけだな」

「あれで我流！？アルクの才能に驚きました・・・」

「そんなことないぞ？アレは既にある流派を参考にして作ったからな」

他にも色々あるしな。中にはとんでもないものもあるし

俺は木刀を地面に置いて寝る

「疲れたー」

「私もです。でもこの疲労感がとっても好きです」

オリヴィエは寝ている俺の隣に座りニコリと笑う。綺麗な笑顔だな・

さわさわと揺れる森の音。暖かな日差し。全てはここから始まった
んだ。俺の意念が渦巻く転生の人生が・・・

第二話 いやぁ過去に飛ばされるとは……アテナめ覚えてるよ(怒)(後書

作「ALONEと!」

ア「神崎啓改めアルクエイド・フォルターの!」

作・ア「あとがきこ〜なり!」

作「いやぁ二話目始まりましたよ」

ア「俺の名前変わったけどな」

作「その名前にも色々過去があるんですがね。前とは違って設定を増やした分フラグを大分所々に配置しないといけないという……」

ア「最終回まで内容が決まってるんだって?」

作「イエス!それも前とは違ってヒロインは二人だけ!」

ア「前はセイバー一人だけだったしな……」

作「残念ながらセイバーちゃんはヒロインではありません!なのhさんとオリジナルキャラがヒロインです」

ア「じゃあここらへんで終わりにするか!」

作「次回もお楽しみに」

第三話 お城と教会 (前書き)

遅れましたぜ……

第三話 お城と教会

はい？俺を王宮に？」

「はい。貴方を王宮に招待したいです」

ちわつす神崎啓・・・じゃなかった。アルクエイド・ファルターだ。オリヴィエが次元漂流者の俺が暮らす家を案じて王宮に来ないかと言ってくれているんだが・・・

「いや、行けるわけないだろ！素性が知れない奴を普通王宮に入れるか！？」

もっともな意見でねじ伏せようとするがオリヴィエはニコリと笑って

「では貴方家はどうするんですか？」

更にもっともな意見を言われた

むう確かにこの世界では知り合いがいらないからな・・・いきなり見ず知らずの奴に家に泊めてくれと言われても止めるバカはいないだろう

「まあそうなんだが・・・。お前に迷惑をかけるわけにはいかないだろう・・・」

「全然迷惑じゃないですよ？それに鍛錬の相手に貴方はもってこいです。貴方がいればわざわざ個々に居る必要もありませんからね。ここは好きなのですがいかんせん遠くて・・・」

「ここから王宮ってどれくらいなんだ？」

「だいたい20kmぐらいですかね」

「遠っ！？お前どうやって来てるんだよ！？」

「徒歩で」

「お前、実は馬鹿だろ！？」

20kmを歩きで行こうとするやつは馬鹿としか言わざるを得ないだろう。俺は消して間違っていない

「？何故ですか？徒歩で来るくらい造作もないことではないですか」

「いや、俺には無理だ・・・」

出来るだろっけど精神的に挫ける、絶対。っていつかこいつは良く来れたな

「お前良く来れたな。俺だったら行く気にもなれないぞ・・・」

「？そうですか？魔力で身体を強化すれば何でもありませんよね？」

・・・あ、そっか。

実は俺が馬鹿だったりした

「おおデカイ・・・」

俺の目の前にあるのは二十メートル以上はあるだろう城だ。

「しかし流石三大国と呼ばれる国の城だな・・・。大きさが半端ない」

「そうですね。この城は私の誇りです」

ここからあの森はだいたい十分程度でついた。オリヴィエは魔力、俺は気で身体を強化して高速で駆けてきた

ちなみに俺が言った三大国っていうのはベルカとベルカと呼ばれているのこの大陸で最も栄えている三つの国のことを言うらしい

聖王オリヴィエ・ゼーゲブレヒトが納める国アヴァロンというのがこの国だ

・
オリヴィエが城門を抜けていたので俺も城門を抜けようとしたら・

っ！

殺気を感じてそこから飛び退く。そして飛び抜いた瞬間に魔力の塊っぽいものが地面に着弾した

「いや、これは・・・剣か？」

地面に刺さっているのは魔力で作られたであろう剣が刺さっていた

「アルク！？誰ですか！出てきなさい！」

ババツ！とオリヴィエの両隣りに現れた男二人

どっちも強そうだな

「聖王女様、お下がりください！賊は私めらが排除いたします！」

「さ、こちらへ」

「は、離しなさい！彼は私の友人です！丁重にもてなしなさい！」

突然現れた男二人。男たちはオリヴィエの腕をつかみ後ろ側に追いやり俺に剣を抜く

「友人ですって・・・？こんな平民を友人になされたと？御冗談を！貴方様はこの国の女王、平民と関わるなど　　っ！？」

「それ以上言ってみなさい私があなたの首と胴体を離しますよ・・・！」

アイリスを展開して剣を男に付きつけているオリヴィエ

「聖王女様！？・・・わかりました。失礼いたします」

男の片割れがそう言うとおリヴィエはアイリスを仕舞い、殺気を解いた

「今すぐ下がちなさい、それと彼に食事を準備するように言ってください」

「はっ」

ババツ！と現れた時のように瞬時に消える

俺、最後まで蚊帳の外だったな・・・

「アルク、すみませんでした・・・」

「別に気にしてねえよ。あの連中は仕事をしたただけだ」

殺されそうになったけどな

俺はまだ続いている監視にため息をつく

「！オリヴィエ様！」

「心配いたしました！ご無事ですか！？」

すんげえ綺麗なメイドの姿の女性とこれまたテンプレな歳をとった
ご老体

「フィーナ！コンバットも心配をかけたね」

「本当です！我々はオリヴィエ様に何かあったのではないかと！」

「コンバット様、オリヴィエ様はそう簡単に死なれる方ではありませんよ？ですが私達メイドたちも心配いたしましたよ？」

「すみませんでしたフィーナ……。少し彼と鍛錬をしていたら予想以上に時間がたつのが速くなってしまったみたいで」

「彼……？」

フィーナと呼ばれた女性。茶色の髪をアップにまとめたかなりの美人さん。しかも目を引くのは身にまとっているメイド服。画面の前の君たちが知っているようなメイドさんではなくかなり清楚な感じの服のメイドさんだ

あーオホン。とにかくフィーナさんは首をかしげて俺を見て納得がいったような顔をした

「あらあらオリヴィエ様にも春が来たんですね」

その言葉を聞くとオリヴィエの顔が真っ赤になった

ははっ……。年頃の女の子が男を家に入れたらそういう反応ですよ
ね……

「な、何を言っているのですかフィーナ!!!」

「あら？違つのですか？他国の皇太子からのお誘いを断っているのはこの方のためかと思つたのですが。違つのですか……」

何か無骨残念がつているな……。つていうか皇太子からお誘いつて……

「この国はこの年で結婚するのか？」

「あら？貴方はこの国の人間ではないのですか？」

フィーナ……さん？見た目がずいぶん若いから同い年ぐらいかと思つただけと実際の歳がわからないからどう反応してよいやら……

「ああ、俺は次元震つて奴に巻き込まれた次元漂流者らしいつす。だから俺はこの国の人間じゃありません」

「次元漂流者……それは……」

「また姫様の悪い癖が……」

……何か一人反応が良くない人がいる。目の前にいる何かダンディなおじいさん。いかにも執事ですつて言っているような風貌だ
「姫様、次元漂流者などというこの馬の骨かもわからない輩をこのアヴァロン城に入れるおつもりですか？」

「そ、それは……。でもアルクはあの小国のような振る舞いはしません！」

小国・・・？

俺だけ話についていけない・・・。まあ中世ヨーロッパみたいな世界観だから戦争なんかは当たり前か

小国って言うのはどっかこの国に近い国の事なんだろうな

「レーズヴェルグの諜報員がまた発見されたのです。こんなこの馬の骨かも輩は入れられません！」

「ですが彼は信用に足る人間です！」

「それを証明できますか！？こ奴を入れてもしレーズヴェルグの諜報員だつたりしたら大変なんことなのですよ！」

「まあまあコンバット様もオリヴィエ様も一旦落ち着きませんか？まず事の本人に聞いてみるのが良いのではありませんか？」

ナイスですフィーナさん

「えーっと・・・アルクエイド・フォルターです。好きなものはマロンケーキ、チーズケーキです。嫌いなものは自分を鼻に掛けるやつです。特技は・・・大抵なことは多分出来るかと思えます」

実際何でもそつなくこなす自信はある

俺の目の前に居るのは金髪に翠の瞳のこれまた美人の女性。

この世界美人率高いな・・・

「うん。私はエミリア・マクガーレンって言います。これからよろしくね？」

ニコツとエミリアは笑った

まあ経緯はこうだ

「アルク、すみません私の力が足りず・・・」

オリヴィエはすまなそうに俺に謝る。今いるのはオリヴィエの部屋らしい。

天井付きベッドにメチャ高そうなシャンデリア、高級そうなカーペットと女王さんらしい高級な部屋だ

「おいおい女王様がそんなに簡単に頭下げていいのかよ」

「自分に非があるのなら頭を下げるのは当たり前です！」

オリヴィエにとってはそれが当然らしい。なんとまあ人間が出来た女の子だこと

「いやまあ衣食住があるところを紹介してもらっただけ有難い。コ

ンバットさんが言うとおり俺は素性がわからない怪しい奴だしな」

「ですが一度戦っただけでわかります！貴方の剣術は真つすぐでした！何にも染まらない真つすぐな……！」

オリヴィエは俺がそう言っても悲しそうな顔をしていた

俺は何故か手が出てしまい彼女の頭を撫でていた

「ア、アルク？」

「あんまり気にすんな。俺は昼ごろにあそこに居るから気が向いたらあそこに来いよ」

それを聞くとオリヴィエは嬉しそうに顔を綻ばせ頷いた

「というわけで今俺は協会に居ると言うわけだ」

この教会、俺が教会と言っているだけで得に信じている神様とかはいないらしい。でも十字架らしきものはあるし毎日お祈りもしてる。どういふことなんだろうな？

ここの教会には身寄りがない子供を預かり大人になるまで育てているらしい

「まあ何とも立派なことだよな……。しっかし魔法かぁ……」

今外は真つ暗な夜。この時代には電気と言うモノが無いので消灯が早い。といつても魔法があるのでそんなに早いものでもないが魔法も人力とほぼ変わらないのでさして変わらないそうだ

便利なのか不便なのかよくわからないよな・・・

俺は外に出てみる。空には星が輝いていて雲ひとつない

「綺麗な夜空だな・・・」

少し広いところは・・・あそこか

俺はひろば的などころを探し足を運ぶ

広さは・・・だいたい100m四方ぐらいあるか？

「これなら試せるか・・・？」

魔力は気と変わらないはず・・・ということは気と同じ身体に流れる精神エネルギーと考えていい

まずは形をイメージして・・・

俺は炎を想像する。紅く、熱いメラメラと燃える炎・・・

ドクン・・・

ゴウウウウ!!!

「おお!?!」

身体が一瞬脈動したと思ったら手から炎が噴き出す。しかもボウじやない何かが大爆発したように噴出した

「制御、制御……」

流れ出ている力を今の半分にして調節すると炎は少しだけ勢いが収まる

「まだ駄目か!？」

出していた三分の一以下の力を流すとようやく勢いが弱まってきた。試した結果、俺の力はどうやら燃費がいらいらしい。使った量は10が最高値だとすると1にも満たない量。魔力の量としてはそこまで多くないみたいだけど十分だ

「後できることは……形質変化とかか？」

炎を出して空中に待機させて少し工夫を凝らしてみると炎がだんだん変化していき五本の槍状になった

「すごいな……。これだったら応用も効くしだいたいのは出来るな」

炎だけじゃなくて三大魔法まで使えるかな？

三代魔法とは火、水、風、の三つを司る魔法の事……。らしい。何か知識が勝手に出てくる

これもアテナのおかげか？

「よしまずは・・・水！」

ドッパア！！！！！！

どこからともなく水が大量に降ってくる

「・・・加減を覚えよう」

とりあえず水は使えるようなので次は風

「おらあ！！」

ドゴオオオオオオ！！！！！！

さつきみみたいな広域じゃなくて次は一点集中にすると竜巻が発生した。中はだいたい風速100kmは超えてそんな勢いの竜巻が

「な、何！？何！？何があったの！？」

音でびっくりしたのかエミリアさんと子供たちが慌てて起きてくる

「あーすまん魔法の練習してた」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

エミリアたちは目の前の凄い竜巻に驚いて声も出ない。

だよなあ
・
・
・

第三話 お城と教会 (後書き)

作「ALONEと!!」

ア「アルクエイド・フォルターの!!」

作・ア「あとがきこくな」

作「さて始まりました作者が自分の近況について語るコーナー」

ア「誰がテメエの近況なんて聞きたがるんだよ」

作「グス……」

ア「まあ最近と言ったらまあ熱中症だろうな」

作「家の中でもなるって話だからな」

ア「しかもペットボトル症候群っていうのもあるらしいぞ。ペットボトル飲料水ばかり飲んでると体中の糖度がなんたらかんたらで」

作「それで異常に喉が渴くらしいんだよな？」

ア「怖いよな……」

作「普通に死ぬらしいしな、熱中症って」

ア「かからないようにしないとな」

作「だな」

作「ではまた次回お会いしましょう」

ア「震えよ！怖れと共に跪け！！」

第四話 因縁

「ふわあぁ・・・」

質素なもので作られた部屋。俺の部屋だ

「昨日は大変だった・・・」

あのあと説明を求められた。当然だ、あんなすごい魔法を使っていたら驚くにきまつてる

詳しいことはまあ避けて話して何とか納得してもらい、布団に入っ
て今だ

「アルククーン！ごはん出来たよぉ！」

下からエミリアの声が聞こえる。

「今下に行く！」

俺はドアから顔を出して答えた

下からは「いと返事が来たので俺は後ろの空間に手を突っ込み開いた
なんと俺、空間魔法まで使えるらしい。これも知識が勝手に閃いた
だけだが何でも空間を操れる能力らしい

「便利だよな、これ。知識ではこの中は時間も止まるらしいから食
べ物入れても腐らないし」

しかもなんとこの中には俺の服が入っていたのだ。私服、寝巻が全部。しかも俺が生前って言うのも可笑しいがまあ死ぬ前に使っていた真剣「月牙」も入っていた。月牙と言うとオレンジの髪 of 死神さんを連想するが一切関係ないのであしからず

これもアテナのおかげだろうな……

あの神様に感謝しながら俺は私服に着替える

「服に困らない……これ嬉しいよな……」

実際この時代の人のファッションは現代を生きてきた俺にとってあまり合うモノじゃない

なんかこう……古臭いのだ。あのRPGのドラック ストの村人Aさんみたいな感じの服……

「……とりあえず下に降りよう」

ちなみにエミリアの朝飯は大変おいしかった、まる

魔力の強化を試しながら十分ちよい。昨日俺が生まれた（誤字にあらず）場所に着いた。この森、昨日オリヴィエが言うには神聖な場所らしく俺が目覚めたのは神聖な場所の中でも特にヤバかったと

ころらしい。

俺、そんなところで寝ててよかったのだろうか……

「そういえばこの世界でいちばん最高の技術を教えて欲しいって言ったけどあれか？魔法の才能だけか？」

いやまああれだけでも十分応用力もあるし強いけどさ、魔法を扱うモノが無いんだよね……。昨日のあれじゃあ使いこなせてるって言うには遠すぎる

「せめてデバイスっていうのがあれば……。ってまた個々に来てしまった」

森に着いて考えながら歩いているとさっき話したとても神聖な場所に来てしまった

目の前にはメツチャ立派な大木が一本ある

「ご神木か何かか？」

それにしてもえらい立派な御神木だな……

そっ……と木に触れるとドクン！と俺の中で脈動する

これは……魔力を開いたときと同じ感覚……

《この魔力……まさか》

「声……？」

頭の中に流れてくるように聞こえる声。だけど姿が見えない

俺の周りには木しかない

「誰だ？」

数えきれない歳月を過ごしてきた……何百年かもっと遙か昔か……。だがようやく巡り合えた……。私の担い手！！！！

ドクン！！

神木が脈動して光り始める

「うお！？な、何だ！？」

光が収まり、目を開くと一本剣が刺さっていた

「大剣……。いや持ち方は片手剣だ。刀と少し似通ってる部分があるな……」

《ようやく巡り合えたな、私の担い手。私の名前はフェンリル。お前の剣だ》

目の前に刺さっている剣は俺に名乗った

これが俺とフェンリルの初めての出会い。だがこれは同時に顔をも知らない親から続く因縁の始まりだった

第四話 因縁（後書き）

作「ALONEと」

ア「アルクエイド・フォルターのー!!」

作・ア「あとがきこゝなり!!」

作「実はニユースです!!」

ア「お、何だ？」

作「これから二週間ずつに定期更新します!!」

ア「おおストック大放出だな」

作「その間に書きたかったガンダムSEED DESTINYの二次創作を書きます!!」

ア「またあちこちに手を出すのかよ・・・」

作「う・・・。だ、だっていいじゃんか!この間久々にDVD見たら書きたくなっちゃったんだ!!」

ア「はあ・・・」

作「というわけであとがきこくはしばらくお休みです！」

ア「では定期更新、楽しみにしてくださいね！！」

作・ア「」ではまた次回！！」

第五話 急展開！！

《ようやく出会えたな私の担い手。私の名前はフェンリル。お前の剣だ》

「……………は？」

「ようやくするとお前は俺の武器になるべく作られた剣つてわけか……………。だけどそれが何で遥か昔に……………」

《まあ神の手違いだな……………。まったくあの神め……………。まあだが私がどれほどのこの時を望んだことか……………！そうだ、まだ主の名を聞いていなかったな》

フェンリルは俺に名前を聞いてくる。本来なら咄嗟に作った名前じやなくて俺の大切な人が付けてくれた名前がいいんだが……………

「俺の名前はアルクエイド・フォルター。だけど本当なら違う名前なんだが生前使っていた名前は使えないらしい。咄嗟に作った名前だが勘弁してくれ」

《いや、アルクエイド・フォルター、立派な良い名だ。互いが名乗ったことで契約は成立した、これより私は主の剣となり武器になる。

これからよろしく頼む》

「急展開だな……。だけど、宜しく頼むな、フェンリル」

俺はフェンリルを掴むと小さなペンダントサイズになった

「おお！便利だな」

《私をいつもあの状態にしておく主の魔力が持たないのだ。この状態は待機状態と考えてくれていい》

「待機状態ね……」

俺はペンダントサイズになったフェンリルを首に掛け、改めて神木を見る。フェンリルが居なくなった所為か神木の神々しさが無くなってる感じがする

《その木は私の神力を吸って育っていたんだ。あれぐらいの神々しさは出る》

「神力？」

またわけわからんワードが……

それは知識が出てこないので全く分からない

《？神力がわからない？そんな馬鹿な……。まさか》

フェンリルが黙ってしまったので俺は黙って待つてみることにした

《・・・わかった。まあ神力の事はお追々話すことにしよう。今は私の扱い方についてだ》

「何か反らされたがまあ乗ってやる。で、お前は魔力と気どちらを使えばいいんだ？」

《基本的にはどちらでも使える。だが私には属性付与と言うモノが出る》

「属性付与？」

《ふむ・・・言葉で説明するより実践だな。主試しに炎を私の刀身に流し見てると言い》

「おう」

俺は魔力をフェンリルの刀身に流し炎をかたどる

すると

ゴウウウ!!!

フェンリルの刀身に炎が燃え上がる。

「おお！すげえ！」

《これが属性付与だ。流した魔力の属性により斬撃の属性が変わるのだ》

まあ意味はわかった。わかったけど・・・

「なんかますますRPG化してるみたいだが・・・気にしない方向で行こう」

うん、そうしよう

そう納得した瞬間に俺は構える

「フェンリル・・・」

《・・・私の主はどうかやら鈍感ではないようだな》

「こっち方面はな」

恋愛系は全滅だ

俺はフェンリルを戦闘状態に戻す。・・・成程魔力をかなりの勢いで吸われてるな・・・この勢いなら二十分持つかどうかだな。身体強化は気でやろう

「出てこいよ隠れてるのはわかってるんだ」

俺が森に言い放つと黒装束の人間ワサワサと出てくる

「ありやまあ・・・。仮想ショーでもやってんのか？」

《だがそれにしては物騒な格好だな》

「殺気も出しまくってるしな」

こいつらが友好的意味で来たわけじゃないだろうな……

「こんな雁首そろえて俺に何の用だ？」

「……貴様の力を借りたい」

黒装束の一人が呟く

俺はその言葉に怪訝な表情をする

「俺の力……だと？」

「……貴様の力量は昨晚の魔法の行使で知れている……。その力、我が国レーズヴェルグに使ってもらいたい」

レーズヴェルグ……

レーズヴェルグの諜報員がまた見つかったのです

コンバットさんの言葉を思い出す

「こいつらがレーズヴェルグの……。成程用件はわかった。しかし昨日のアレを見られてるとは……」

隠ぺいは十分だったはずなんだけど……。まあエミリアさん達は敵意が無かったから見逃しちゃったけど……

「我らは隠密部隊……敵に知られるなど愚の骨頂」

「難しい言葉知ってるな」

いちいち言葉遣いが昔の日本らしい。少し二てる文化でもあるのか？

「今回は我らは戦いに来たわけではない。近々我らは小国連合でア
ヴァロンへ戦争を仕掛ける。それに貴様に参加してほしい」

「……………」

「返事は今とは言わない……。だが良い返事を期待している」

黒装束が一機に消える

「……忍者みたいなやつだったな」

《それは同感だ》

「お前忍者わかるのか？」

ちよつと意外

《主とのリンクで記憶を覗いたのだ。しかし…………》

「しかし？」

《このエッチい本の量は凄いな……。ほうこんなことまで…………》

「貴様何を覗いているうウウ!!!」

プライバシー侵害ですよ!!!

「しっかし敵さんの本丸が直接接触してくるなんてな」

俺は森の神木の前で寝転びながら呟く

ああ日差しが気持ちいいですね・・・

《それだけ主を警戒しているということだろう。主がいい返事をしなかつたら真つ先に殺しに来るだろうよ》

「だろうなあ・・・」

気配察知の鍛錬しとかなきゃな・・・。

「とりあえずそろそろ・・・お、来た」

ザンツ！と木々の葉をかき分けながらオリヴィエが空中から登場した

「よっ」

「アルク、早いですね・・・」

少し息を切らしながらオリヴィエが声をかけてくる

「まあな。ちょっとウォーミングアップをな」

「そうですね・・・」

オリヴィエはそれだけ言っただけ構える

？何か様子が・・・

「アルク」

「！何だ？」

オリヴィエの声は心なしか低く、何かを探るような声だ

「裏切ったのですか・・・？」

「っ！！！」

オリヴィエの言葉に俺は目を見張る

聞かれてたのか！

「人が悪いな覗きか？」

「・・・・・・・・すみません」

「まあ・・・俺も予想外だったしな。とりあえずお前は裏切るとしたらどうする？」

「・・・・・・・・貴方を殺します。貴方は危険すぎる・・・・・・・・！」

祖国を守るため・・・か

俺はフツと笑ってフェンリルを構える

「！その剣は……」

「俺の剣だよ。フェンリルって言うんだ」

《宜しく頼む》

「っ！！インテリジェントデバイス！」

「みたいだな。俺も信じられなかったけど」

この時代ではインテリジェントデバイスは凄い希少らしい。何故アヴァロンが三大国までになったかというインテリジェントデバイスのおかげだ。インテリジェントデバイスは这个世界では最強の兵器だと信じられている

ゆえにインテリジェントデバイスがある国には攻められず友好的な関係をもつしかない

「さらに貴方を見逃すわけにはいきませんね……」

ザアアア……

雲行きが悪くなり日が遮られる

「少しの間だけでしたが……最高の友人と言ってもいい相手でした」

「そつだな……俺もだ」

「あ？」

かすかに聞こえたオリヴィエの言葉に俺は悪寒が走った

「集え我が手に満ちるのは獄炎。我が敵に地獄のごとき業火を！」

《！しまった離れる主！！！》

「ちっ！」

俺の下で円陣が走り俺は咄嗟にその場から離れた瞬間に

ゴオオオオオオオ！！！！

触れたら一瞬で灰になりそうなほどの密度の炎が空に昇った

「あつぶねえ……」

「よそ見をしている場合ですか？」

真横からオリヴィエの声が聞こえる

「！？」

俺は上半身を屈める。丁度首のあたりに剣が通る。冷や汗をかきながら足蹴りを放つ

「ぶっ！」

「っ！」

オリヴィエは後ろに下がりました更に魔力を練る

「まったく俺は魔法は素人だつての！」

《主やれ！》

「フエンリル？」

《威力の制御は私がやる！だから主は魔法を発動させることだけを考える！！》

・・・はっ

「頼もしすぎるだろ・・・！」

俺は体内にある魔力を練る。

イメージしろ

魔法はイメージだ。この魔法を放つたらどんなことが起きるか。それをイメージすることで魔法は発動する

ドクン！！！！

「刃を以って血に染めよ

」

魔力を練り体外に放出する

「これは……!?何て……」

《マスター！離れてください！アルク様から異常な量の魔法を感知しました!!》

《これが主の真の魔力量……自らリミッターをかけていたというのか……》

「ブラッディダガー」

赤を纏った黒。それが正しいだろうか？俺の魔方陣の色は黒が主体だがそれに赤を纏っている。混ざり合っているんじゃない、纏っているんだ

俺が呪文を完成した瞬間に身体が勝手に動きフェンリルを横に振るう。すると俺の前に数銃はあるだろうダガーが出現した。そして殻が勝手に動き手を横に振るう

「っ!?くっ!」

《Sayclitd Cluster!!》

俺の魔法にオリヴィエは虹色の魔力の砲撃を撃ち相殺する

「そんなセイクリッドクラスターが相殺しか出来ないなんて……」

《とんでもない才能ですね……》

オリヴィエは驚きで目を見開く

「すげえな俺の魔法……」

《あれでも威力を大分制御した……。とんでもない才能だな、主》
唯の短剣が砲撃と相殺……。だが……

「はあっはあっ……」

燃費悪すぎだろオオオオオオオ！！！！何だよこのすげえ疲労感！

《どうやら魔力の練りが甘すぎるようだな……。あんな雑な魔力の練り方であれだけの威力を発揮すればそうなるのは当然だ》

「はあっ！はあっ！うるせえ……」

どうする……。一旦撤退するか？いや国外に脱出するか……。あの場面を見ていたのは多分オリヴィエだけじゃない……。最悪エミリさん達に被害が……。

俺はそこまで考えて自虐的に笑う

いやもう遅いか……。俺と関わっている時点でアウトだ……。
この時代の取り調べのやり方はわからないが良いものでは二だろう。
……。どれだけオリヴィエが人徳者でも取り調べまでは監修できないからな

「フェンリル、撤退するぞ」

《別に良いが……。どうするつもりだ？》

「どうもきな臭い……。オリヴィエに見つかるのがどうもタイミングが良すぎだ」

《誰かが糸を引いている、と?》

「……かもな」

フェンリルの言葉に俺は言葉だけで答える

国外って言ってもどこに行けばいいのやら……

「ま、そこら辺は後で考えるか……」

ザアアアアア!

雨が強く降り出す。雲も俺の運命を表わしているように暗く淀んでいた

第六話 出発

雨が降る。理由もなく深々と

「つらあー!!」

「やあー!!」

ヒュッ！ガギー！ギン！！

横なぎを上に乗って交わし上段からの斬撃を止められ相手の力を利用して離れる

「はあはあ……」

ちくしょう何回打ちあつたっけかな……。体力が持たねえぞ……

雨の所為で身体も冷えてきてるし……。服がぬれて動きづらい！

ずりゅー！

バックステップで後退しようとしたら雨でぬかるんだ地面で滑る

「しまっ」

「貰ったあー!!」

オリヴィエが鬼気迫る表情で剣を振るっ

やられる・・・？俺が？こんなところで？・・・いや違う俺はこんなところでえええ！！！！

ドクン！

一瞬で世界が変わる。何もかもが知覚できる・・・今振っている雨の軌跡。オリヴィエが降ろうとしている剣の軌跡まで全てが・・・

「これは・・・」

驚いてる場合じゃない！俺は崩した体制を無理やり戻す

ゴキン！

身体の一部が悲鳴を上げるが気にしている余裕はない。フェンリルを地面に突き立てての筋力を利用して棒飛びの要領でフェンリルを視点に空中に飛び上がる

「なっ！？」

ガキン！

いきなりの俺のトリッキーな動作にオリヴィエはついていけない。何より決定的なのは横薙ぎに振るった剣で出来た隙

「うらあ！！！！」

「ガフ！？」

空中からの踵落としをオリヴィエの背中を蹴り飛ばす

ドゴンー！

「はあっ！はあっ！」

「う……」

地面にたたきつけられたオリヴィエは衝撃の所為でまともい動けない

「俺の勝ちだ……」

ガクと膝が崩れ落ちる

限界だ……。体力も半端ねえほど使い果たした……。こいつは少しヤバいな……

「はあはあ……終わりだ……」

俺はフェンリルを抜いて瞬動でその場を離脱する前に振り返りオリヴィエを見る

「ほんの少しの間だったけど世話になった……」

俺はそう言っつて瞬動でその場を離脱した

エミリアSide

ガチャ・・・と家の扉がいた開いた音が聞こえたので玄関まで行く
とアルク君が傷だらけ泥だらけの格好で立っていた

「エミ・・・リア・・・」

ガク！と膝をついてアルク君は倒れてしまった

「ア、アルク君!？」

《大丈夫だ。主は傷こそ酷いように見えるが傷もすでに修復に向か
っている。気絶したのは極度の魔法講師による精神疲労だろうな》

「貴女は・・・インテリジェントデバイス？」

《この世界だとそういう呼び名だな。我が名はフェンリル。貴様の
事は主の記憶で知っている》

「そう、わかった。とりあえずアルク君の傷の手当てしなきゃね！
そう言って子供を呼んでアルク君を運ぶのを手伝ってもらって部屋
に入る

「本当にさっぱりとした部屋だね・・・」

最低限のものしか置いていない。寝るベッドとクローゼットとか

《ほおこれが主の部屋か・・・》

「貴女アルク君の部屋を見るの初めて？」

《ああ、主と会ったのは今日が初めてだからな。それと私の事はフェンリルと呼んで構わないぞ、エミリア》

「！そっか・・・わかった。これからよろしくねフェンリルちゃん」

《ちゃん！？・・・まあ良いか・・・》

アルク君にも素質があったということかな・・・。そろそろ私達の事も話さないかね・・・。

エミリア Side End

「う・・・」

ここは・・・。

俺は痛む身体を押さえながら身体を起こす

「俺の部屋か・・・。教会に着いた後気絶しちまったのか・・・」

《気が付いたようだな、主》

隣を見るとフェンリルが置かれている。っていうか床に刺さってる

鞘、作らなきゃな

「どれくらい気を失ってたんだ？」

《半日、と言ったところか。無理もない。私を起動した上に魔法まで行使したのだからな》

「かなり辛かった・・・」

「ただど何かが俺の中で外れた感じがした・・・アレは一体？」

（《あの時の主の力、まさしく神力・・・。主は一体・・・？アテナめ、肝心なところは教えず私を送り込むとは・・・！》

「フェンリル？」

《む？》

「どうした？黙りこんで」

何か考え事してたみたいだけど黒いオーラが出始めてて怖かった・・・

《いや、主の言つとおり考え事をな。あ、そういえばエミリアが主が起きたら下に来てくれと言っていたぞ》

「エミリアが？」

何だろうか・・・って確実に怪我の事だよな・・・

俺はフェンリルを待機状態に戻して首に掛けると扉を開け階段に足をかけたところでははた止まる

「あれ？フェンリルって何時の間にエミリアの事名前で呼んでるん

だ？」

疑問に思ったが答えそうにないのでこれ以上聞かないことにした

「来たね・・・」

食堂へ行くと子供たちとエミリアが待っていた。でもいつもと違う雰囲気食堂を包んでいる

「アルク君には話さないといけないことがあるんだ」

エミリアがそう言うと子供たちが一斉に腕をめくる。そこには・・・

「なっ・・・!!!??」

腕に何かが埋め込まれていた

「私達は人体実験「黒騎士」の被験者。身体の中にある細菌を注入された化け物よ」

「黒・・・騎士」

俺はその言葉を愕然としながら復唱した

神界

「な、何ですかこれは!!??」

私の私が渡した力にはこんなもの存在しません!!!

「黒騎士?確かにあれはベルカの時代ですがそれはForceでの設定……。しかも私があの子を送り込んだ平行世界にはそんなものは存在しないはず……」

創造神の石柱の私の行動を邪魔できる存在……

「私と同じ創造神……」

五柱いる中で石柱「アルクエイド」……彼はもう亡くなっている……
……ということは私に観賞できるのは……!!

「アダム……!!!!」

貴方はまだあのことを諦めていないのですか……!!

「ですがまずいです……アダムが動いているということはまだ覚醒してないあの子では……!!」

いえ、フェンリルがいます。多分あの子が何とかしてくれるでしょう……

「私も・・・動かないといけませんね」

私はある神の所に向かいました

アテナSide End

エミリア達の腕にあるのはデバイス。それぞれ違うデバイスだが何か特別な力を走っているのはわかる

「「黒騎士計画」。時空管理局と言う組織が人間にデバイスを埋め込みEC細菌を注入した人間。私達はその被験者なんだ」

「黒騎士・・・」

《ふむ。成程、お前たちから出ていた不思議な気配はそういうことだったか》

「でも何でそんなことを・・・」

俺にそんなことを話してメリットがあるだろうか？

エミリアは俺の言葉にそっと笑った

「アルク君とは長い付き合いになりそうだからね。この国から出るんでしょ?」

「・・・」

一瞬どう答えようか迷った。この国から出ればエミリア達はどのようなのだろう？そう考えたら正直に答えようか迷ったのだ

「アルク君。確かに移動すれば私達にも多少デメリットがあるんだ」

「！だったら！」

「でもここに居るのも危険なの。一か所にとどまると言うのは逃げている私達にとって恐ろしく無づ貸しいことなの」

「エミリア・・・」

「大丈夫。アルク君がいるもの。ね？皆」

エミリアさんが子供たちに聞くと子供たちは一斉に笑った

「アルクお兄ちゃんがいれば大丈夫！」

「私達も一緒に行くう！」

「俺も！」

「お前たち・・・」

たった数日しかいなかった俺をこんなに慕ってくれるなんて・・・

俺は覚悟を決めた

「ああ、行こう！正直今回の事件。きな臭い・・・」

「ええ。事の顛末はフェンリルちゃんから聞いたよ。私はアルク君に賛成」

その後荷物をまとめ、数日だが世話になった教会を後にした

第七話 自衛商業都市ラスワール

「アトワリックさん！」

国境を離れ、アヴァロンを出た俺達は隣の国、自衛商業都市「ラスワール」に来ていた

エミリアが寄りたいたと言ったのはラスワールの中でも有数の商業ギルドに来ていた

ギルドだよ・・・どここのRPGだよ・・・

「ん？お、エミリアじゃないか！！元気にしていたか！？」

アトワリックと呼ばれた三十代過ぎぐらいの親父さんと呼ぶのが似合いそうな男だ

「エミリアだって！？どこだどこ！？」

「エミリアさん、結婚してくれ　！！！」

エミリアと名前が聞こえただけでギルドから男が殺到してきた

「うおー！？」

「あっははははー皆元気そうだねー」

『もちろんー！』

「すげえ……」

ギロツ!!

俺が声を上げると睨まれる

この程度の奴らなら睨まれても大丈夫だが……すげえモテてるんだなエミリアさん

「エミリアこの男、誰だ？」

「ん？ああ、この子はアルク君と言って私が気に入ってる男の子」

「ちよっ！エミリア!？」

《あちゃー……。エミリアの奴……》

『な、何だって〜!!??』

こつなるだろっよ!!

「逃げるが勝ち!」

『待てや!そこの小僧!!』

《ちなみに主が行ったような格言は小物な悪党が使う格言だ》

「変な知識はいらん!!」

あの壮大な鬼ごっこその後俺は商業ギルドの皆さんとすっかり仲良くなっていた

「そうか・・・ついにバラしちまったのか・・・」

アトワリックさん・・・じゃなくて親父さんはそう言って笑った

「はい・・・。アルク君は信用できる子でそして・・・私達の救い主かもしれない」

「まさか・・・聖人なのか？」

セイジン？

俺はその単語に首をかしげる。成人・・・いや違う。星人？いや、異星人じゃないんだから俺はどっちかと言うと異世界人だけどなあつはつはつは！・・・馬鹿か俺は・・・。

「聖人か？」

《やっと正しく変換できたか・・・》

「うっさい。で、エミリア、聖人って言うのは・・・」

俺が効くとエミリアは話しくそうにした

「聖人って言うのは私達「黒騎士計画」の天敵。私達の能力を自由にできる存在」

「自由にできる存在・・・？」

そう、とエミリアは言った

「暴走させることもできるし。私達を操ることもできる。そして・・・黒騎士は不死だけど・・・殺すこともできる」

「・・・聖人・・・」

何でそんな能力が俺に・・・

「聖人は元々作られた能力じゃないらしい。黒騎士も聖人の家系のあるものを応用して作られたから聖人の影響を受けるんだ」

と親父さんが言った

「親父さん、詳しいですね・・・」

「ん？ああ、俺は研究員だったんだよ」

「研究員？」

《まさか黒騎士の・・・》

そうフェンリルが呟くと俺は目を見開く

「そうだ。フェンリルの言うとおり俺は「黒騎士計画」の研究員だ。

だがあの計画は人の尊厳を無視している……。俺はそんな研究がしたくて研究員になったわけじゃない。だから残っていた被験者・
・エミリア達とあの子供たちと一緒に逃げてきた」

「成程……」

《だが黒騎士計画は一体どこの国がやっていたんだ？私が見る限りもろ刃の剣だが能力だけ見るならとんでもない力だ。それ相応の技術能力が無ければ……》

「計画を立てたのは三大国に恨みを持つ小国のリーダー的国、レーズヴェルグだ。だが小国がいくら集まったところでたかが知れている。だがそこにある組織が関与してきた……」

「時空管理局……!!」

友達から聞いたなのは原作の話は管理局の闇の関与が凄まじいということだ。どれ暗昔から存在していたかは友達を知る限りではわからないらしい。

だが……闇の関与……ここまでだとはな……!!

「そつだ。時空管理局はあるロストロギアを狙ってこの世界にやってきた。だから技術提供をする代わりにロストロギアの提出を求めた」

「そして……レーズヴェルグはそれを受けた」

親父さんに続いてエミリアさんが締めた

「じゃあ最近小国が集まって何かをしているって言うのは……！」

「ああ、アルクの考えている通りだと思うぜ。戦争の準備だよ。エミリア達はいないが管理局の支援があった今の小国が集まったら、いくら三大国とはいえ無事では済まないだろうな」

「戦争か……。難しいね……。何で人は争うのかな？」

《人が人である限り争いは無くならない。だろう？主》

「そうだな……」

良く覚えておけ啓。人が人である限り争い事は無くならない。だがそれを止める手立てはいくらでもあると言つことを

師匠……

そしてそのために力を付けておくこともまた正義だ

「親父さん」

「何だ？」

「ラスワールにどこか訓練できる場所ってないか？」

「あるっちゃあるが……。どうするつもりだ？」

「力が必要なんだよ……。絶対的な力が。守るためには……！」

あの時にはアイツを守ってやれる力が無かった……。だから今こそ。

守りたい人たちがいる

「……………ここから歩いて三十分ぐらいだ。行ってみる」

「サンキュ、親父さん」

俺はギルドを出て虚空瞬動で飛んだ

虚空瞬動で飛ぶと偉く早く着いた

そこは閑散とした平地で魔法を試すにはうってつけだった

「フェンリル」

《Set Up》

フェンリルを待機状態から戦闘状態にして構える

《主の魔力量は聖王との戦いで随分と増えた。しかも驚異的な燃費の良さはそのままだ》

「じゃあ結構大きい魔法も使えるわけだな」

《そうだ。だがまだ主は魔導師になって日が浅い。魔法を使いこなすにはそれなりの時間が必要だ。使いこなさなければ魔力は唯の宝の持ち腐れだ》

「わかってる」

フェンリルを突き立て精神を落ち着ける

「我が手に集え」

魔方陣が出現して魔力が俺の周りに集結する

「敵を滅ぼすは終末の火 示すは終末への輪廻」

俺の魔力の光・・・赤を纏った黒色が俺の手に集中する

「灰へと帰れ ラグナロク」

《L u g n a l o k B r e a k e r》

ドオオオオオオン!!!!!!

遠雷のような音が聞こえ黒い閃光が青色を隠していた白いものを吹き飛ばした

「・・・これが俺の力・・・」

《そつだ。だが制御が全然なっていない。今のは本来なら今の魔力の百分の一以下で撃てるはずだ》

「百分の一・・・そんなに無駄に消費してるのか・・・」

《ああ。本来なら主は魔力の事を考えるまでもない魔法の使い方としても大丈夫なはずなのだ。何故なら魔力行使で使う魔力消費が異常なほどに低いのだ》

「そうなのか……。詠唱はあれで合ってるのか？」

《随分と暗い詠唱呪文だな。大規模なものになると詠唱は必要だが小規模なものなら詠唱は必要ないぞ》

「じゃあ今度はもっと小規模なものをやるか」

えつとお……。アレだ、オリヴィエとの戦いに使ったアレ

「……。ブラッディダガー」

スガガガガ!!!

俺の周りに刃がざつと二十ぐらい出現して地面に刺さった。そして地面が1mぐらい陥没している

「……。これ、ちゃんと非殺傷設定になってるのか？」

《なってるぞ。だがあの威力ではショック死だな》

「……。俺人間やめてるな」

《今さらだと思っぞ》

……。確かにそれは自分でも思う

自己紹介といきますか！(前書き)

お久しぶりです

自己紹介といきますか！

神崎啓改めアルクエイド・フォルター（イメージボイス 立花慎之介）

身長 179cm

体重 68kg

好きなもの 音楽・料理（作る方）・読書など……

嫌いなもの 台所に潜むカサカサ動く通称”G”

インテリジェントデバイス「フェンリル」

元はある神の神剣だったところをその神が死んでからお蔵入りになっていたのをアテナが引っ張り出して啓に送った。だが失敗して送るっ時間をかなり前に設定したためフェンリル本人はかなりの時間を過ごしたようだ

性能としてはかなりのもの。口調は少し鋭いが性格は良い

待機状態は紅いネックレス。戦闘状態は赤と黒がメインカラーの両刃の片手剣

備考

孤児で道端に捨てられているのをある剣術家が拾った。その家で剣術を習ったりしていたのだが……

料理はそこそこできる。味は中々

容姿はちょっと癖っ毛の黒い髪に黄色がかつた瞳でかなりのイケているメン

第八話 最後の平穩

「ふあ……」

ボサボサの頭をガシガシと掻き毟る

眠い……

すぐ近くにある日光が降り注いでいる窓を覗くと雲ひとつない快晴の空が広がっている

「うむ良い天気だ」

ラスワールに着いて、親父さんから色々情報聞いた俺達は中立国となっているラスワールに一時的に身を置くことになって既に二日たっている

依然レーズヴェルグの動きは不明で不穏な動きをしているとしかわかっていない

「おいっす」

「あ、おはようアルク君」

エプロン姿で厨房に立って料理しているエミリア

「おはようアルク兄ちゃん！」

金髪で元気な声を出している快活そうな男の子はアル

「おはよー！」

アルと一緒にテーブルを拭いているポニーテールの女の子はイルカ

「おはよだよー！」

ドス！！

「ぐっふ！」

あまりの威力に俺は後ろに転び背中を打ちつけた

み、鳩尾に……！！

今鳩尾に突撃してきた小さい紫色の髪の少女はイエル

他にも後二人いるが見当たらない

「イ、イエル……抱きついてくるのは良いんだがもうちょっと
手加減をしてほしい……」

「？」

俺は鳩尾部分を抑え青い顔でイエルに言ったがイエルは首をかしげ
ただけだ

わかってないらしい

「……………はあ」

俺は身体を起こし腹の上からイエルを地面に立たせ俺も立ち上がり
埃を払う

「ん、おはよう皆」

今日もまた一日が始まる

最近の日課になっているランニングは俺の一つの楽しみになっている

何故なら……

「お、アルクの坊やじゃないかい！ほれ、リンゴ持ってきな！」

「お、おばちゃんサンキュー！」

「アルクじゃねえかい！エミリアちゃんとは宜しくやってんのかい
！」

「エミリアとはそんな関係じゃねえよ！」

「またまたあゝ！ここらへんじゃそっちのほうもかなり進んでるっ
て噂だぜ？」

八百屋のおっちゃんが下品な笑いを浮かべる

「こら、アナタ！アルクは鍛錬の途中なのよ！邪魔しないの！」

ズガン！

人間が出していい音じゃない音を出して八百屋のおっちゃんのお尻を殴る

死んでないよな・・・？あ、何とか生きてるみたいだな・・・。ビクンビクンって跳ねてるけど

「邪魔して悪かったわね。頑張ってきてね」

「ういっす」

俺はランニングを再開する

《だいぶなじんできたな》

ほど良く息が上がってきたところにフェンリルが話しかけてきた

「ん？何がだ？」

《この町にだ》

俺はその言葉にこの街にかなりの安堵感を覚えていたことに初めて気が付いた

俺は笑って

「そうだな」

とだけ答えた

「おし着いた」

ランニングを辞めて止まる

周りは何もない五百メートル行ったところにようやく森の影が見えるぐらい広い

「さて、始めんぞ」

《ああ》

フェンリルを首から外して右手に持ち魔力を練り上げる

「フェンリルセットアップ」

《Stand by ready!》

常人だったら感知出来ないほどの魔力が吸い上げられフェンリルが戦闘状態になる

《戦闘影を準備・・・完了。戦闘レベルはSランク・・・術式はランダム・・・人数は3・・・設定完了。投影》

瞬間三人の人影が出てきていきなり一人が砲撃を撃って残り二人が各々の武装を展開してくる

砲撃は手に小範囲の防御魔法を張って砲撃の方向を変えて避け、残り二人の攻撃の防御に入る

『 ……！！！！！！』

声にならない叫びをあげて剣を振りおろしてくる幻影A

それをワンステップでかわしステップの先にいた幻影Bの横振りの斬撃

「！連携良すぎ！」

フェンリルをかざしてBの攻撃を防御。だがAが剣を地面に刺してそれを支点に身体を上げ蹴りをかましてくる

咄嗟にフェンリルを地面に刺し身体を屈めAの攻撃を避け、逆に顎にカウンターを喰らわせ、さらに回転蹴りで吹き飛ばす

そして瞬時にフェンリルを地面から抜いてBの剣を力任せに弾き飛ばし、峰でBを吹き飛ばした

この間十秒弱

ドクン！

「っ！？」

《Protection》

強大な魔力を感知してフェンリルが防御魔法を張ってくれる

「サンキュッ！！」

縮地を利用して幻影Cの後ろに駆け走りフェンリルの刃を首筋に当てる

「終わりだぜ？」

Cが手を挙げて訓練は終了した

訓練が終わったから幻影達がポリゴンになって消えて行った

「ふい〜」

《見事だ。やはり主は前世で武術か何かをやっていたのだな》

「まーな」

俺は地面に寝っ転がって青い空を仰ぐ

師匠・・・

俺の剣術は日本で最強と呼ばれた剣豪から教わったものだ。その剣豪が使っていた剣術を独自に改造したのが「零式」

まあ本当は日本刀で使う技なんだが何故かフェンリルでも使えたからまあ良しとする

「実戦経験もある。師匠からの指令でSPまがいなこともした」

《成程……。ならば原作の最強クラスの魔導師でも勝てまい。ト
ツプクラスの体術、剣術に実戦経験。これほどの強みはないだろう
な》

「どうだろうな……」

この後数時間鍛錬を続けてへろへろになりながら帰った

「うー……。ちかれた……」

「もう……。だらしないよアルク君。寝るんだったらお風呂入った
らっ」

だらーとだらけているとエミリアが呆れながら言ってくる

「疲れたんだよー……」

「特訓なんだから当たり前でしょ？」

「まあそうなだけどさ……」

・ エミリアの言う通り、特訓だから疲れるのは当たり前なんだが……

疲労はそんなことを考えさせる余裕も奪う

あの後訓練場から全力ダッシュ、しかも遠回りをして来たせいで足がガクガクしているのだ

「とりあえず風呂……」

俺は幽霊のように立ち上がって幽霊のように浴場へ消えて行く

カポーン

「どこでも風呂場はカポーンって擬音が付くんだな」

仕様です

「いやそれはわかってるけどさ……」

《主、誰と話しているのだ？》

「あーいやこつちの話だ……」

《そうか》

プカプカ……

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

《・・・・・・・・》

プカプカ・・・

「あのさ・・・・・・・・」

《何だ？》

俺はフェンリルに話しかける

「お前って機械なのか？」

《似て非なるものだ》

「へえ・・・・・・・・」

俺はプカプカと浮いているフェンリルを見る

《ふう・・・風呂というのは気持ちが良いな》

「そ、そうか・・・」

似て非なるモノって・・・

俺はフェンリルの曖昧な言い方に首をかしげる

フェンリルは実際人間臭いし機械とは到底思えない。確かりりカルなのはのデバイスってのはAI搭載型のデバイスと非搭載型の二種

類だって聞いている

「なのになぁ・・・」

《どうしたのだ？さっきから。鬱陶しくて仕方ないぞ》

「あー・・・」

《何だ気持ち悪い・・・。聞きたいことがあるなら素直に言ったらどうだ？》

「あー・・・うん。そうだな。今さっきお前って機械とは違うけど同じようなもんって言ってたじゃん？」

《ああ》

「それってつまりどんな存在ってことなわけ？」

《私はいわゆる神剣というものだ。神が使いし剣・・・。その中でもトップクラスの力を持つのが私だ》

「はぁ！？そんなえっらい剣を使ってるのかよ俺は！？」

そんな偉い剣をただ魔法を使うためのデバイスとかに使ってたのによ・・・

俺は罰とか当たったらどうしようとかどうしたらいいかとか一瞬で考える

《大丈夫だ。まずアテナが寄越したのだから大丈夫だ》

「?アテナってそんな偉いのか?」

北欧神話の中では最高位なのは知ってるけど・・・

《・・・ふむ。まあ話しておいても問題はないだろう》

そう言っつてフェンリルは話し始めた

《神と言っつのは神の世界・・・神界と言っつところに住んでいる。そして神の中でも当然力のランクがある。そしてその中でもトップクラスに君臨するのが創造神五柱だ》

「創造神五柱?」

《五体の創造神たちの事だ。人の中では創造神は一体とされているようだが事実は違う。五体の創造神から神界は成り立っている・・・。そしてまだそれより上の力を持つ者が居る》

「はい?創造神より強いのかよ・・・」

《ああ。創造神は今の主の一万倍は強い》

概念から違うから傷一つ付けられないがな
とフェンリルは付け足した

「じゃああ話の流れからするとアテナってというのは・・・」

《ああ。創造神の一体だ》

「俺そんな凄い神と出会ったのかよ……」

俺は浴槽の淵に手をかけてお湯から体を出し、お湯に浮いているフ
エンリルを首にかける

浴場から出てタオルで体を拭いて用意してあった服に着替える

「まあだいたいわかった。にしても……」

そんな凄い剣を使ってもリスクが無い……。あり得るのか？こ
都合主義とかそんなバカな話で片付けて良い予感がしない

もしかしたら何か裏があるのかも……。リスクを背負わない理
由……

「まあ考えても仕方ないんだけどさ」

《？》

俺は風呂場から出た

「ぶぐ……はぐ……もぐんぐ……」

「……」

「アルク兄さん凄いな・・・」

「すごいね」

イルカとイエルが呆然として俺の食事を見ている

俺は食事は大喰らいで食事をかなりとる。そうしないと次の日エネルギー切れで動けなくなるのだ

何故か何故か燃費が悪い。魔力や気の燃費は良すぎるぐらいなんだがな・・・

「ふぐ・・・まあ・・・ガツガツ・・・エミリアの飯が・・・んぐんぐ・・・旨いってのもあるけどな。ガツガツ・・・」

「ふふっありがとう」

エミリアはほんのりと頬を赤く染めながら俺の食事を見ている

「そんなにおいしそうに食べてくれるなんて料理人冥利つきるね・・・」

「ガツガツ・・・誇っていいと思うぞー・・・ガツガツ・・・」

うむ、旨い

数十分後

「ふいー」
「ちそうさん」

俺の前には大量に積まれた皿が鎮座している

「あれだけあったのに完食・・・」

「すっごいねー」

「うん、ホント凄い・・・」

「アルク兄ちゃんすんげえー」

「ふん・・・」

「あははは・・・」

おっと紹介が遅れていた

偉そうに「ふん・・・」と言ったガキはグレイ。何故か俺は目の敵にされている

しよっちゆう魔法の勝負を申し込まれるがボコボコニしている

んで赤い髪の女の子はエルザ。剣の腕は一流。魔力も人並み以上に
ある期待の女の子だ

この子供五人とエミリアが俺が居た教会の全員だ

「ふあ・・・ああ・・・」

日もとつぷりと暮れて俺はベッドの上で寝ている

「最近だんだんと身体に変化があるみたいだな・・・」

今まで出来なかったことが出来るようになっていく・・・俺がアテナに頼んだ願いは「世界」でもっとも強い力」とそれを扱う技術。

オリヴィエとの戦いの際のあの感覚がそうなのだろうか？

「あーわからん！！わからんことを考えてても仕方ない。寝る！」

俺はベッドに再度寝っ転がり目をつぶった

そしてこれが最後の平穩の時間だった

第九話 慰安旅行って何すか？と聞かれたらどうすればいいのだろうか？

「はい？慰安旅行？」

「いや、何だそれ？俺はただ単に温泉に行こうと言っただけだぞ？」

おっとそうだったか。って合ってんじゃない！

俺は今ギルドにいる。親父さんが何を血迷ったか温泉に行こうと言いだした

あ、ちなみにちゃんとお湯につかるといふ風習はある。お湯につかるといふのは日本だけらしいがここは世界が違つので良しとしておこう

「いや、でも何でいきなり温泉？」

「最近ギルドの奴らは働きづめでな……。お前も最近ギルドの依頼を受けるようになったんだろ？」

そうなのだ。最近冒険者ギルドに出ている高ランククエストを受けている。

よしでは冒険者ギルドについて少し紹介しよう

冒険者ギルドとは最近増えてきている魔物を狩るのが主な仕事だ。だが狩る仕事ばかりではなく、雑用も引き受けたりする

冒険者はそれぞれランクがあり、それによって受けられるクエスト

のランクが決まる

下から順にF E D C B A Sとなっている。

ちなみに俺はランクとしてはCなのだが親父さんの紹介文で最上級クエストまで自由に受けられるようになってる

何故親父さんの紹介でここまで出来るかと言うと、親父さん、その昔Sランクの冒険者だったらしいのだ。その人物の紹介ならと冒険者ギルドが許可してくれたというわけだ

ちなみに何でそんな人が研究などをやっていたのかは話してくれていないので不明

さて説明終了

「まあね、ここを出た後のことを考えると文無しじゃ困るからな」

「ふうーん……。今のところ達成率100%なんだろう？大したもんだ」

親父さんは剛毅に笑ってそう言った

俺は苦笑して肩を竦める

「なんの、親父さんには負けるよ」

俺がそう言ったら親父さんは殊勝だと言って苦笑した

「さて、じゃあ事情を説明したところで場所について説明する」

「あ、俺も温泉行くの？」

親父さんのギルドの人間じゃないからてっきり置いて行かれるかと思っただけだ……

「当たり前だろうが！俺のギルドに入っていないだろうが俺のダチは皆家族みたいなもんだ。一緒に行くのは当たり前だ！」

バシン！と頭を叩かれる。頭蓋骨が割れるかと思った……

マジでこの人何で研究者なんかやってただ……？

「わかったよ……で、どこ行くんだ？」

「ここだ！」

机にある紙を見てみると新しく出来た温泉パークらしい

何か凄い近代的なんだが……。この世界の文明レベルが良くわからん……

「わかった……。で、どうすればいいんだ？」

「このことをエミリアたちに伝えて欲しいんだよ。それと行くかどうかも聞いてきてくれ。頼めるか？」

「オーケー。わかった」

俺は「紙、貰って行くぞ」と言って親父さんの部屋を出た

「ん？温泉？」

「ああ、親父さんが行かないかだつてさ」

食堂で昼飯の準備をしていたエミリアに親父さんとの会話を伝えるときよとんとした顔で首をかしげた

「温泉！？わーい！」

「こら、イエル？厨房で暴れちゃだめだよ？」

「はい……」

近くでエミリアの手伝いをしていたイエルがしゅーんとなった

「イエルは温泉行きたいか？」

「うん！」

イエルは最高の笑顔で頷いた

ふーむ……

「エルザ達にも聞かないとな……」

「そうだね。私は皆が行きたいって言ったらいよいよ。」

「わかった」

とりあえず聞いて見るか

「イルカーアルー」

コンコンと部屋のドアをノックすると中から「はいー！」と可愛い声で返事が返ってくる

「あれ？アルク兄さん」

「よっ！中、入ってもいいか？」

「うん、どうぞ」

俺はイルカに許可をもらって中に入る

「で、どうしたの？」

「これなんだけどさ・・・」

俺はイルカに温泉のことが書いてある紙を渡す

イルカはその紙を受け取って目を通し始めた

「ふーん温泉パークねえ・・・」

「親父さんが皆で行かないかだつてよ」

俺がそう言つとイルカは笑顔で頷く

「うん、私は良いよ？アルも良いつて言うだろうし」

「オツケ。じゃああとはグレイとエルザだな・・・」

俺が立ちあがると

「イエルは行きたいつて・・・言つたよね？」

「ああ、もうすでに聞きこみ済みだ。答えもイルカの言つた通りだ」

「あはは・・・」

邪魔したなと俺は行つてイルカの部屋を出た

「さーてあの二人は・・・」

多分あそこだな・・・

俺達が住んでいる商業ギルドはギルドの会員が住めるように宿舍もついている大きなギルドだ。

でも何故か鍛錬所もあるのだ。商業ギルドなのに

グレイとエルザはいつもそこで鍛錬をしている。

エルザは魔法こそ種類を限定されているがそれを補う剣術。そしてその限定されている魔法を上手く使っている

グレイは氷の魔力変換資質を持っていてそれを巧みに使い相手を追い詰めるという使い手だ

「さて……」

ズドオオオオン……

鍛錬所で何か地響きのようなものが聞こえた

「やっぱな……」

鍛錬所に向かうと魔法を使っているグレイとそれを斬りながら進んでいるエルザが居た

「ふむ……」

少し実力試しだな

俺はブラッディダガーをバレない様に構築して狙いを二人に付ける

《あまり虐めてやるなよ》

「お、今回初めて喋ったな」

《作者が書くのを忘れていたらしい》

「」愁傷さま」

ごめんね、フェンリルさん

俺は構築したブラッディダガーを一人に向かって発射する

「」！！！！」

二人とも瞬時に反応してその場を飛び退いた

「おーやるう」

パチパチと俺は鍛錬所の入り口から入る

「何だアルクさんですか・・・ビックリさせないでくださいよお・・・」

「そう言っつてちゃんと反応するところ流石エルザだな」

「え？そ、そうですか？／＼／」

エルザは頬を染めて照れている

愛い奴よのお・・・

「ふん、あんなもんかわさなくても迎撃出来たけどな」

「そしていつも通りの反応ありがとうグレイ」

コイツの所為で気分が最悪だ

「あんだよ文句あんのか？」

「口のきき方に気をつけるガキ」

「や、やめなよグレイ！」

ガルル……！とグレイとにらみ合っているとエルザが間に入った

「うつせえ……エミリアは俺が守る。すっこんでろ、おっさん」

「黙れマセガキ。ったく……エルザ、親父さんがコイツに行かないかってさ」

「？」

俺が差し出した温泉パークの広告を手にとる

「温泉……ですか？」

「ああ。ギルドの皆の慰安旅行みたいなもんだ」

「慰安旅行？何ですかそれ？」

エルザが首をかしげる

親父さんの時もそうだったけどお湯につかる風習があって、何で慰安旅行って言葉が無いんだ？謎だ……

「あーまあ何時もがんばっているギルドの奴らのために仕事を忘れ

てリラックスする旅行のことだ」

「ああ！成程！」

わかったのか・・・っていうか慰安旅行ってこんな説明でよかったのか？

「で、どうだ？」

「うーん・・・そうですねギルド長さんがそう言っているなら・・・

」

「俺は別にどっちでもいい」

「じゃお前は留守番でもしてる」

「あ？あんだと？」

こんなやり取りを何回かして俺はまた厨房に戻ってきた

「おいエミリアって何かいいにおいがする」

「あれ？おかえり。どうだった？皆行きたいって言ってた？」

「おう。グレイは任せるっていったから留守番させようぜ」

俺の言葉にエミリアは苦笑する

「あはは・・・もうアルク君とグレイってほんと仲悪いね」

《もはや犬猿の仲だ》

「そうだねー・・・」

フエンリルの言葉にしみじみと言った感じで頷くエミリア

「じゃ、親父さんに行くなって伝えてくる」

「うん。それから帰ってきたらお昼にしよう?」

「おう」

コンコン

「親父さん、いるかー?」

おついるぞーと返事が返ってきたので扉を開けて入る

「エミリア達行くなってさー」

「おう、わかった。じゃあギルドの奴らの準備が整い次第行くか!」

「でもさ、ギルド全員って80人強ぐらいいるんだろ?そんな大人数で行くのかよ?」

「そこんところは大丈夫だ。貸し切りだからな」

親父さんの言葉に俺は目を見開く

「貸し切り！？大胆なことするんだな」

「ふふん！良い男つてのは大胆なもんさ」

良い男つて・・・

「何だその目は」

「いや、別に・・・」

「アルク、お前留守番決定な」

「ああ！？悪かったって親父さん！」

「いや、ダメ。ぜってえ今俺のこと馬鹿にした」

ギクッ

凶星だ・・・

「冗談だよ。んじゃお前も準備して来いよ」

「冗談キツイぜ・・・。わかった。あとでな」

「おう」

俺は部屋を出て食堂に向かった

第十話 覗きは男のロマンス

エ、エミリアさん？、すんません！そ、そ

お久しぶりです。沖縄の修学旅行は最高でした！

第十話 覗きは男のロマンだ

エ、エミリアさん？す、すみません！そ、そ

「おーここかぁ」

俺達商業ギルド一行が着いた旅館ははつきり言ってすげえの一言しか出ないと思う

一応建築技術はここまであるんだな

俺達の目の前に立っている建物はかなり凄く豪華に作られていてあちこちに補強などされていて強度もバッチシだ

「ふわぁーすごいねー」

「マジですげえな・・・」

「本当・・・」

「・・・・・・・・・・」

「すごく・・・大きいですね／＼」

おい、エルザ何でそのセリフをほっぺを赤らめて言うんだ！？ほれ、見ろ！周りの男どもが前かがみになってるではないか！！

そしてそれを冷ややかな目で見てる女性陣が怖い！

「さ、さて入るか・・・」

他の男と変わらず前かがみになりながら内またで歩いて行く親父さん
すくく……気持ち悪いです

「こんにちは。ようこそアトワリックさん。お久しぶりです」

ごつつ綺麗な女の人が出てきて親父さんにペコリと一礼した

「おう、レイ。元気にやっってるみたいだな！」

「ええ。おかげ様で」

和やかに会話をしているところにギルドの男の人が親父さんの肩を
たたく

「おやつさん知り合い？」

「ん？おお！こいつはレイフィール・フォン・ヴェスタンだ。昔の
俺の冒険者ギルドのチーム仲間だよ」

「えー！？レイフィールってあの……！？医神って呼ばれていた……
！」

エルザが驚いたようにビククリした声を上げる

「そんなに凄い人なのか？」

俺がそう言つとエルザが信じられない人を目にしたかのように目を見開いた

「え……？本気で言ってるんですか？」

「いや、大真面目なんですけど……」

その言い方少しムカつくぞ

エルザは呆れた顔をして肩をすくめた

「はぁ……アルクさんはそっちにあまり詳しくなかったんですね……」

「すみません……」

何故か俺が悪い気がしてついつい謝ってしまった

「ねーエミリアー」「いしん」って何？」

「んー？昔すごい冒険者さん達のグループが居てね？そのグループの中にいた治療専門の魔導師が「医神」って人だよ？何でも治しちやうんだって」

「へえー！！すごいね！お姉ちゃん！」

「ふふ、ありがとうございます。そして貴方がアトワリックが言っていた聖人……アルクエイド・フォルターさんですか」

「ん？はい、そうっすけど・・・」

ジロジロと観察される俺

すげえ居心地悪い・・・

「ふふ・・・」

シユン！

レイフィールの姿が消えて後ろから殺気が来る

チャキ！

「・・・何の真似？俺、アンタに恨まれるようなことしたかな？」

レイフィールの後ろに回り込んでブラツディダガーを首筋に当てる

「いいえ。ただのこの世界の命運を任せて良い方なのか試させてもらったのですよ」

「は？」

わけのわからないことを言われて俺は怪訝な顔になる

「レイ」

「わかっていますよ。これ以上は禁句なのでしょう？ささ、遅くなつてしまいましたかようこそ当旅館へ」

「・・・・・・・・・・」

いつの間にか俺の拘束から脱出していたレイフィールさんはペコリと斜め四十五度の完璧なお辞儀をしてどうぞこちらにと言っ中に入っ行って

俺はブラッディダガーを消して殺気を解く

「氣い悪くしたか？」

「まあな。いきなりあんなことされて怒らない奴いねえだろ？」

無然とした顔で親父さんの言葉に答える

いきなり初対面の人に殺されそうになるとか勘弁してほしい

「さっきのレイの言葉はあまり気にしなくて良いからな」

親父さんはそう言って歩いて行っ

「この世界の命運ね・・・・・・・・」

「ここがお部屋です」

レイさんが指したのはズラーと並ぶ部屋

「え？いや、どこっすか？」

たまらず首をかしげた俺は悪くないと思う

「ここに並ぶお部屋全部ですよ？アトワリックから聞いてないんですか？」

不思議そうな顔で首をかしげるレイさん

あのクソ親父……

ちなみに当の本人は可愛い子ちゃん「引っかけてくら〜」とか言うてどっかに行ってしまった

「ありがとうございます」

「ふへえー疲れたあ……」

俺と同室のキールがぼやいた。こいつはギルドの一員で古参の一人だ

歳は……確か二十いくつって言ってたな？

「なあ、アルクー」

「んだー？」

ダラーとしてしているとキールがニヤケた顔で話しかけてくる

「ここは温泉旅館だよな？」

「そつだなー」

「温泉と言えば、覗きだよな？」

「そつだ」 はぁ？

突然の馬鹿な発言に俺は体を起こす

「何言つてんだ？」

「何言つてんだつてお前、ウチのギルドは綺麗どころがかなり揃ってるんだぞ！それなのに風呂を覗きにいかないなんてイチゴショートケーキにイチゴを乗せないくらいおかしい！」

「例えが良くわからん。でもまあ・・・楽しそつだな」

俺はニヤリと笑う

「お、なんだかんだ言つても乗り気なんじゃん！おっしゃ、他の奴らも誘うぜ？」

「だな」

《（こいつら私が居るといふことを忘れてるな・・・）》

ここは四階からなる構造をしていて、一階が食堂、風呂場を設けている。二階から上が宿泊部屋となっている。だが一階一階の広さが半端ない

ホントに文化レベル中世なのかってぐらい部屋一つ一つが現代風なのだ

「すげえよな・・・」

《主、私は知らないぞ？こんなことしたら大変なことになると思っ
がな》

「馬鹿言え、皆で何かするから楽しいんだよ。それに風呂場の覗きはロマン、だろ？」

《人の性別で言うとな女の私には理解できない。そして軽蔑モノだな》

まあ普通はな・・・

俺は苦笑して歩きだした

作戦はこうだ。一階にある風呂場を目指して各自、敵に注意して行動すること、それだけだ

風呂場の絶好の覗き場所はどうかやら魔法で確保しているらしい。魔法の無駄遣いだな・・・

そして覗き構成員の一人が女性陣の会話を盗聴したところ、俺達が覗きをやることを考慮して二回に分けて入るらしい。風呂に入っていないもう一方の女性陣が見張りをするらしい

むう厄介だ・・・

なので各自、敵に留意して楽園まで進めということだ

ザザッ！

お、念話か？

『HQから各員へ、二階東側階段で 1が敵と接触、戦闘中とのこと。 1から情報で、東側には敵が複数潜伏中。気を付けられたしとの事』

「 1了解」

《（馬鹿としか言えないな・・・）》

ちなみに俺が居る所は三階だ

三階の東側の階段を降りようとしたら 2と接触した

《私はこんなくたらないことには手を貸さないぞ》

「はいはいわかってますって」

俺は隠れながら二階の様子をつかがう

一、二・・・三

多いな・・・それほど警戒してるってわけか・・・

ふむ、久しぶりだがやってみるか

「・・・・・・・・・・」

スツと俺は壁から出て歩き始めた

《お、主やっと自分の過ちに気付いたか。そうだ別に覗きなど下劣なことをするべきなどでは無いのだ》

「・・・・・・・・・・」

一步、二歩三歩と女性陣に近づいていく

《・・・・・・・・・・？》

そして女性の一人に完璧に近づいたが気付かれてない

「おし、成功だな」

《な、何故だ？何故気付かない》

「気配遮断だ」

《気配遮断だと……？主、何故そんな高難易度のスキルを持つて……。だが声が漏れればわかってしまっただろう？何故喋っているのに気付かない》

「そこはほれ、消音魔法だ」

《……もはや無駄スキルだな》

「それでもないと思うけどな」

重宝すると思うぜ？男は

俺はそのまま進み、ついに女風呂の前までたどり着いた

「こちら 1。HQ応答せよ」

『こちらHQ』

「ターゲット前まで到達。指示を」

『な、何だと！？アルクテメエどんな裏技使いやがった！……！』

キールが叫ぶ。

俺は顔をしかめる

「声がかいんだよ……。まあ裏技つちゃあ裏技なんだがな……。まあとりあえず指示は？」

『もちろん突入だ!!』

「りょーかい」

俺は気配遮断でさらに歩を進める

「ここが楽園の扉か……………」

とりあえずマナーなので服は脱いだ。別に見えないので良いかと思つて

まあ見えてるのに見せたいと思つた奴は変態だがな

《脱いでる主は変態ではないのか?》

「だから、別ん見えるわけではないんだから良いんだよ!」

では

「いざ、楽園へ!!!」

ガララララ!!!

扉を開けた先は……………

「(ニッコリ)」

エミリア
修羅が居ました

「アルク君……?」

ニッコリ笑顔のまま、俺に話しかけてくるエミリア修羅

こゝ、殺される!冗談抜きで殺される!

「は、はい!何でございますでしょう!?!」

「何でここにいるのかな……?」

「えっと……それは……」

視線を泳がすがガシ!と掴まれて視線を元に戻される

こゝ、怖いよー視線が怖いよー!笑顔なのにすごい迫力だよー!

「正直に……はつきりと言って……?」

「覗きをしようとして居ました!?!」

……

「天註!?!」

「にぎやあああああ……!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

この時、俺は本当の地獄を見た

第十一話 最後の晩餐って不吉だよな

「まったく！アルク君は全く！」

ぶんすか怒りながらエミリアは俺の前に座っている

当事者である俺はと言つと・・・

「ほんとマジで許してください・・・」

真面目に土下座をしている。こつちの人に土下座の意味がわかるか不明だが誠心誠意謝るためだ

「もう！女の人の裸が見たいなら・・・私の・・・ゴニョゴニョ」

「え？何か言つたか？」

「ふえ！？な、何でもないよ！？／＼／」

「そ、そうか？それにしても顔が赤いような・・・」

「ア、アルク君に裸を見られたのを思い出しちゃったんだよ！！
！／＼／」

「そ、そうなんだ・・・」

余りの剣幕と罪悪感の所為でとくに聞くまでもなくエミリアに言い負かされてしまった

ズズツ！と鼻血を啜り、頭の上にあるタオルで顔を拭く。

「いや、それにしてもいい湯だな・・・」

《何でもこの近くに温泉の脈と言うモノがあるらしい》

「近くに火山でもあるのか？」

近くに火山があるなら温泉源があるのもうなずけるんだが・・・

《いや、それらしきものはない。山があるにはあるんだが本当にただの山で火山ではないようだ》

「ふーん・・・」

謎だ・・・

あ、謎と言えば・・・

「なあフェンリルは聖人って言葉に聞き覚えはあるのか？」

《身体能力が人外な七人の事なら知っているぞ》

「それは別の作品だ」

やめるメタいことを言うな

《真面目に言うとな「最初からそうしてくれ」・・・。まあ真面目に言うとな・・・》

また突っ込んだらループするんだろっな……

俺は突っ込まずに先を続けさせる

《聖人は昔、魔導を司る七人の人のことを指すらしい》

「魔導を司る？」

《言葉通り、魔力を使い、事象を作る……つまり魔導の原点を作った人間達らしい》

「魔導師の原点……」

《そもそも魔力とは何か知っているか？》

「？ただの力じゃないのか？」

《違う。大雑把に言えばそうなのだがわかるように説明すると神の力の劣化番だ》

「神の力……？」

俺はその言葉に軽い頭痛を覚えた。何故か頭の奥に刺さるような・

「何でそんなモンを人間が持つてるんだ？」

《人とは神の生り損ない……というのも可笑しいが……。神になれなかった者たちの事だ》

「そう・・・なのか？」

《ああ。だから人は神の力、「神力」の劣化番「魔力」を使える。気や霊力と言った力は人間が独自に発見した力だ》

《つまり聖人と言うのはその魔力を使い、術を作り事象を操った最初の人間と言うことになる。だがその力は巨大だ》

「何でだ？別に魔力量の優劣は今に始まったことじゃないだろ？」

《いいか？人は歴史を重ねるごとに魔力の絶対量が減少しているのだ。神の生り損なった初めのころは莫大に魔力が存在していたが減っているのだ》

だがとフェンリルは続ける

《聖人の血筋は何故か魔力が衰えない》

「衰えない・・・？何でだ？」

《それは何故かは私にもわからない。聖人の血筋は特殊なのかもしれないな》

「成程・・・」

若干のぼせ気味の体を湯船から出して、脱衣所に入り服を着る

「聖人が世界を救う・・・ね」

俺はレイさんが言っていた言葉を思い出す

世界を救う、つまり何らかの危機にこの世界はさらされるってこと
だろう。外側・・・もしくは内側から・・・

「わっかんね！柄じゃないんだよな、こっぴうシリアスな雰囲気」

俺は頭をガシガシとかきながら風呂を出た

「さあ、当旅館の自慢の手製の料理です！たんと召し上がってくださいー！」

レイさんが笑顔で言うどギルドのみんなは声をあげて食べ始めた

「おいしそうだね」

エミリアが料理を見ながら笑顔で言う

そっだなと言って俺はスプーンを手に取り料理をつつき始める

《平和だな》

「何だ藪から棒に」

フェンリルの呟きに首をかしげる

《もうすぐ戦争だということだ》

「だからこそだろ？」

俺は笑いながら裸になって踊っているギルドのみんなを見る

《どついう意味だ？》

「戦争が始まればどんちゃん騒ぎじゃなくなる。殺伐として血が流れる。そんなのが長い間続くんだ」

《・・・・・・・・》

「だからだよ・・・」

そう俺もどつするか決めなくちゃ・・・

楽しい喧噪の外では月が夜の街を明るく照らしていた

第十二話 動き出す事態

「さて……」

慰安旅行から帰って一週間。いつものように訓練を終わらせ、荒く
なっていた呼吸を深呼吸して整える

レーズヴェルグが動き出す時間もあとちょっとだろうな……。今
のうち遊んでおきますか！

「さ、帰るぞフェンリル」

《ああ、そうだな》

俺はフェンリルを待機状態に戻そうとし ようとしたところで
中断してフェンリルを縦に向け何かから身を守る

「魔法……？」

刀身に当たったのは魔法だ

《主、魔導師だ。数は二十！》

フェンリルがそう言ってすぐに紅い点々としたものが飛んでくる

魔法か！

「ちい！」

前に駆けだしてよける。

にしても俺を狙って来るとはな……!

「誰だ?生憎と俺はこんなことされるいわれはないんだが?」

俺がそう言つと黒装束の人が俺を囲つように現れる

「貴様は今回の戦争の最大の壁……我らが王が貴様を抹殺せよとご命令だ」

「ああそうかい……。だが……」

フェンリルを担ぎ直して構える

「生憎と俺はまだ死ねないんでね。お引き取り願ひましょうか
ッ!!!」

「ガア!?!」

駆けだし、一人を斬り飛ばす

「なっ!?!は、早い……!」

「オラオラア!どこ狙つてやがる!」

フェンリルを地面に突き刺してその上に手をつき回転蹴りを上段で喰らわせる

「ガッ!?!」

「ガフ！」

「ぐあ！？」

黒装束がどんどん倒れていく

弱いな……。一人ひとりは大したことないんだが……

「喰らえ！」

「ハアア！」

二人で来られると連携が高いから、メンドイ！！

「零式「糸龍閃」」

ヒュルルル……！

指から高水圧で固めてある水系が飛び出る

久しぶりだな……。コレは！

「はあああ！……！」

ヒュンヒュン……！

「な、何だこれっ！？」

「た、助k！」

水系でどンドン気絶していく。これは・・・やっぱ疲れるな・・・！
神経使うし！

「終わりだ！」

零式「糸龍閃」 終幕！

『ぐああああああ！！！！』

残っていた黒装束が全員が終幕でやられた

「ふう・・・」

《主は無敵だな・・・》

「師匠はこれの倍は操れてたぜ？」

《人間ではないな》

「あの人を人と認めたら自然界のナニカが崩れる」

苦笑しながら気絶させていなかったリーダー格っぽい奴の頭を掴む

「何が目的だ」

「ふっ・・・我々は勝つたのだ・・・我々の目的・・・はきさ・・・
まの足止め・・・」

「っ！おい！それどういう意味だ！」

「今・・・頃、きさ・・・まの街は・・・フハハハ！レース・・・
ヴェルグ・・・万ッ歳ッ！」

口の中で何かを飲み込みガクンと気を失った

「自決しやがった・・・」

《何も死ぬことはあるまいに・・・》

俺は死んだ黒装束を火葬して骨は土に埋めておいた。他の奴らはラ
スワールの騎士団を呼んで回収してもらおうことにした

「すぐ戻るぞフェンリル」

《ああ。私も嫌な予感がする・・・》

街に戻ると俺は愕然とした

「な、何だよこれ・・・」

店は破壊され、広場にあつた噴水は見事に壊されている

急いで誰かいないか探してみると噴水の近くに誰かが倒れているの

を見つけた

倒れていたのは八百屋のおばちゃんだった

「おばちゃん!」

《しっかりしろ!何があった?》

「エ、エミリアちゃんたちが……」

エミリア!?

「エミリア達がどうかしたのか!」

「エミリアちゃん達が連れていかれたんだよ……助けてやって
おくれ……」

そう言っておばちゃんは気を失った

とりあえず倒れている人たちは生きてはいるようだ

「どうなってんだよ……!」

エミリア達が連れて行かれた?何故?

俺はレーズヴェルグの研究者だった

黒騎士計画。私達はそれの被験者なの

ッ!!!!!

前のエミリアと親父さんの言葉を思い出す

「黒騎士計画……」

《主？》

ぐっと拳を握りしめる

握りすぎて血が出てきた

「レーズヴェルグの奴ら、黒騎士計画を完遂させるつもりだ……」

《まさかエミリア達が連れて行かれたのは！》

「あいつらは黒騎士計画の重要なカギだから……」

マズイ……どうする？完全に後手に回った……！

「いや……簡単なことだ」

魔力を追えば良い。人からは常時魔力が流れている。しかも人にはそれぞれ魔力波長があつてそれをたどれることが出来る

「フェンリル、魔力波長は追えるか？」

《追えないこともない。だが遠すぎて曖昧だ。それでもいいのか？》

「相棒を信じるさ。頼りにしてるぜ！」

俺はフェンリルを戦闘状態にする

《これが地図だ》

ヴォーン！

と地図が映る。ここは外壁の周りには森が生い茂っていて中には魔法生物まで生息している。それ相応の勢力が無ければ近づけない

「ということは……敵は多数できてる可能性が高い」

多数で行動してるってことはそれだけ移動に時間がかかるはずだ。だがもし……少数精鋭の場合は街がここまでするほどだ。かなりの実力持ちってことだな……

「待っていてくれ……必ず助けだす」

騎士たちが駆けつけたのを見て俺は事情を説明してギルドに戻る

ギルドには大半の奴らが残っていた

「アヴァリオ！」

俺が声をかけると水色の髪の優男がこちらを向く

「アルク！無事だったのか！」

「ああ！襲われたけどな。お前も無事でよかった」

そう言うとアヴァリオは顔を陰らせる

「すまない・・・エミリア達が・・・」

「いい。フェンリルに魔力波長を追ってもらってる。すぐに見つけて連れ戻すさ」

「そうか・・・。ギルドはこんな状態だ。すぐには応援に駆け付けられないが・・・」

「大丈夫だ。皆は治療に専念してくれって言っておいてくれ」

「・・・わかった。気をつけて」

「ああ。サンキュ」

俺達は拳をぶつけ合ってそれぞれの戦場へ向かった

レーズヴェルグ首都「アーリバー」

レーズヴェルグ国城「王の間」

「黒騎士計画のほうはどうだ？」

「はっ。先程私の部下がサンプルの奪取とは博士の捕獲に成功した

と連絡がありました」

「それは大儀であった！これで……あの三大国が滅びるのだ！そして……我がレーズヴェルグがベルカの国を、土地をすべて手に入れる！」

歳をとった男は口の端を曲げながら歩く……歩く

「くははは……ははははは！アーツハツハツハツハ！！！！！」

その声は後に残る世界の大戦の序章の鐘だった

商業都市「マスール」

「隣町に来たみたは良いけど……」

《情報も何もないな……。とりあえずギルドに顔を出したらどうだ？》

「お、そうだな」

俺は三ヶ月の間に随分の依頼を受けていた。ランクは……AとB

ぐらいだな

とりあえずギルドに……

カランコローン！

「ちわーっす」

声をかけてはいると中に居た男や女がこちらを見る

相変わらず空気が悪いな冒険ギルドは……

「こんにちは。どのような御用件で？」

「ああ、いやレーズヴェルグや近隣の小国の情勢が聞きたくて。聞かせてもらえるかい？」

「別に良いですが……。そうですね……。小国は三大国を落とすべく団結し、兵力を束ねています」

「つまり……。戦争の準備……。だと？」

「ええ。三大国は国力こそありますが国は国です。小国がかなり集まった連合と三大国。どうなるかはわかりませんが……。泥沼の戦争になるでしょう」

受け付け嬢は悲しそうに眼を伏せる

「そうか……。ありがとな。本当だったら情報量を渡すところなんだが……」

俺はふと目に入ったクエストが目に入った

これは……

「なあ、今クエストって大丈夫か？」

「え？あ、はい。大丈夫ですが……」

俺はクエストボードのSランクの部分を引きちぎる

依頼内容……山に住むドラゴンの討伐または捕獲

報酬……五千万

うん、妥当だな

俺はそのクエストの紙を破って受け付けの所まで持っていく

その瞬間に「ざわっ！」と周りが騒ぎだして「やめとけやめとけ！」とか、「オメエさんみたいなぼっちゃんじゃあ無理だよ！帰んな！」とかヤジを投げてきた

俺はそれを無視しながらクエストの紙を受け付け嬢に渡した

「あ、あの……本当に受けるんですか？」

「あ？ああ。情報量も渡さないといけないしな」

「そ、そんなのいいですよ！タダでいいですから！」

「んじゃあ俺が勝手に受けたいから受ける」

「……………」

俺がそう言つと茫然としたように絶句する受け付け嬢って……あ

「名前聞いてなかった」

《馬鹿だな》

フェンリルの声を聞くと更に周りが騒ぎだした

「インテリジェントデバイスだと……!？」

「何で伝説のデバイスをあんなガキが……!？」

などなどe t c . . .

ああ、うざったい……

「悪い。アンタの名前、聞かせてくれないか？俺はアルクエイド・フォルター」

俺の名前を聞くと受け付け嬢が驚いた表情をする

何故に？

「ア、アルクエイド・フォルター!?ま、まさかあのアルクエイド・フォルターさんですか!？」

「ど、どのアルクエイドかわからんが……。多分そうです……。受け付け嬢の興奮っぷりに俺は若干引きながら答えた

な、何故俺の名前を聞いただけでそんなに興奮するんでせう？

《主の名前は知れ渡っているんだよ。主がAとBランクの難関クエストを、しかもそれを100%の確率でクリアしてくるから必然的に有名になるな》

「oh……」

「わ、私ユーリアって言います！ファンでした握手してください！」

「ああ……はい」

差し出してきた手を握って握手する

まあこんな可愛い子にもてるんだったら嬉しいinnaあ……。デへへ

《鼻の下が伸びてるぞ。スケベ主》

「おっと……。って誰がスケベ主だコラア！！」

《スケベにスケベと言って何が悪い》

「んだとコラアー！！」

《エミリアに良い付けるぞ》

「ほんつと調子こいてすんませんでしたあ!!」

俺は綺麗に土下座した。わ、悪いか! エミリアは本気で怒ると怖いんだぞ!?

しかし、デバイスに土下座するマスターって・・・

俺は若干落ち込んだのを感じた

「あのーアルクエイドさん? 何してるんですか?」

「あ、ああ何でもない」

俺は立ち上がって埃を払う

「俺の事はアルクでいいぜ。アルクエイドって長いし呼びなれてないからな」

「え!?! じゃ、じゃあ私の事もユリアって呼んでください!」

「ユリア?」

「私のあだ名です! 友達が付けてくれたんですけど」

「ふうん・・・。わかった。俺はしばらく滞在するつもりだからよろしく、ユリア」

「は、はい!」

《とりあえずクエストの受理お頼めるか？私達は今文無しでな。宿に泊まれないんだ》

「ええ！？そ、そうなんですか……？」

「ああ……。情けないことにな……」

ギルドの奴らに尋ねたが無かったらしい

あんときは泣いたね

「とりあえずコイツをちゃっっちゃと倒してくるわ。んじゃあなー」

ギルドの扉を出て俺は縮地を使った

「え！？あ、あのアルクさん！クエストの説明っていない……？」

当然ユリアにそのことがわかるはずもあるまい

第十三話 テテテテテーッテッテテー あるく は どんこん を つかいま

ガンガン行くぜ！

第十三話 テテテテー ツテツテテー あるく は どころん を つかいま

「ん、着いたな」

わずか十分ほどで国境の山にたどり着いた

ドラゴンねえ・・・なんかワクワクしてきたぞ・・・

「オラ、ワクワクしてきたぞ！」

《世界的に有名なセリフをこんなところで使っていないで先を急ぐぞ》

「わかるんですか!？」

ビックリだぜ・・・

157

また縮地を使って更に山を登る

「む、魔力・・・」

《ふむ。中々にデカイな。それなりの練習相手になるか・・・》

ドラゴンを練習相手って・・・俺も大概チートだよなあ・・・

頂上まで登ると白いなんて言葉じゃ言い表せないほどの綺麗な鱗を
持ったドラゴンが居た

『誰……?』

「ちわつす三河屋です」

《あら御苦労さん》

「どうもです」

『……何をしに来たのですか?』

はっ!しまった、ついつい……

「えつと貴様様を倒しに来たしがない冒険者です」

《尊敬語尾が二つくっついてるぞ》

「ごめそ、わざと」

《だと思った……》

『立ち去りなさい……ここは貴方達のような人間が来る場所では
ありません……!』

お?何かお怒りな感じ?

ドラゴンはゆっくりと立ち上がりグオオオオオオ!!!と吠えた

「アンタを倒すと五千万なんだ。悪いがその命……貰い受ける

!!!」

《ラサーか。あの兄貴気質はいいな》

「お前本当に何なんだ!？」

戦闘開始

「さアしっかりやるか!フェンリル!」

《Stand by ready! Set up!!》

戦闘状態になったフェンリルを振り回しウォーミングアップをする

一方ドラゴンは羽根で飛び上がりブレスを溜め始める

「あ、ずるい。俺飛べないのに」

《いや、飛べるぞ》

「え、マジで!？」

《魔力をゆっくり全身に回して身体が浮くイメージを作れ》

言われたとおりにやってみると・・・

ふわりと足が地面から離れ始める

「おっ！おおお！浮いたぞ！」

《それくらい当然だ》

『喰らいなさい！！』

ドゴオオオオ！！

とてつもない量が濃縮したブレスが飛んでくる

が、どれだけ威力が高くとも当たらなければどつとどつといつことはない
！！

「ブラッディダガー！！！」

剣が浮いてブレスに標的を定める

「オラア！」

シユカカカカカ！！！！

ツドオオオオン！！！！

ブレスにブラッディダガーがぶつかり大爆発を起こす

すごっ！どんだけ魔力を固めてたんだよ・・・

かなり離れてるのに爆風がこちらまで来るのを感じて冷や汗をかく

「すんげえなドラゴンって・・・」

《あのドラゴンは推定・・・SSSランクだな》

「それってどれくらい？」

《本来のリリカルなのはに出てくる広域型最強の魔導師より三ランク上だ》

「えー・・・」

そんな奴どないせえっちゅーねん

・・・これ関西人に怒られるね

「鱗を持ってけば大丈夫か？」

《原則ドラゴンが討伐できたかは確認隊が結成されて確認に行くらしい。だがほとんど簡易なものらしく鱗や剥いだもので判断するらしいぞ》

「おし、それで行く」

説得でもらえるか・・・？

「あの一ー!!」

「グオオオオオオオオオ!!!」

あれれー！？さっきまで人語でお喋りになっていらしたのにー！？
何故突然咆哮にチェンジ!?

「俺は別にアンタを殺しに来たわけじゃあ」

《「お前の命貰い受ける！」》

「あー……」

時に迂闊さは命取りになる

「ごめん！前言撤回！鱗とかどつか身体の一部が欲しんだ！頼む！」

『本当ですか……？』

お、人語……ってこれ、念話？

「ああ。ちょっとお金に困っててな。分けてもらえるか？」

『私はある意思に言われてある人を探しています。その人のことを教えてもらえるなら』

「Ohご都合主義ってやつですねー。で、誰？」

『アルクエイド・フォルターって人です』

ふんふんアルクエイド・フォルターねえ……どっかで聞いたことがある名前だな？アレーオカシイナー

《現実逃避はよせ》

「アハハー。アルクエイド・フォルターって俺だけ……何故俺

を探してた？」

『アテナ様に使いを頼まれた・・・』

アテナー！！

「・・・とりあえず降りない？」

俺達はいったん頂上に降りることにした

「で、さつきも言ったけど、何故俺を探してたんだ？」

『アテナ様に貴方の使い魔になるように言われました』

「What!？」

《ほづそれはまた・・・》

いや、こんな奴が使い魔になってくれたら嬉しい限り・・・って

「使い魔って何？」

《・・・・・・・・》

『・・・・・・・・』

すみません知識不足で

「……要約すると使い魔って言うのはフェンリルと俺との関係み
たいなものらしい。だが使い魔は独自に動いて存在するだけで主の
魔力を吸い取るらしい」

「俺、大丈夫なのか？」

『貴方なら大丈夫。私が保証しましょう』

「そうか……。じゃあせっかくの女神様の御好意だ。俺の、使い
魔になってくれるか？」

『はい。喜んで』

こうして俺はドラゴンを手に入れた

テテテーテツテツテテー！あるくはどらごんをてにいれ
た。けいけんちがひやくあがった

お？何かお馴染のメロディーが流れた気が……

「あ、そういうえ契約ってどうすれば……」

『血と血の契約。それが魔法での契約。どつて魔法での契約
で』即決……』

「血と血って何か痛々しいじゃん」

あと何かまがまがしいから。あれ？最初の理由と変わらない？

《主がそう言うなら。私は異論はない》

『私はどちらでも構いません』

そうドラゴンが呟くと足元に魔方陣が浮かび上がる。それが俺とドラゴンを包み込み、上にあがって行った

『終了しましたよ』

「早っ！？そして簡単！？」

大事な契約なのにそんな軽くて良いのか！？

俺は茫然としていたらドラゴンが縮んで行って最終的には肩に乗る程度に小さくなった

「おお・・・」

《ほう自分で形を変えられるのか・・・》

「ガオオ〜」

ボウとライターぐらいの火を噴くチビドラ。あ、チビドラっていうのはちびつちやいドラゴンの略な。

センスが無いと思った底の君、微塵切りにするよ

『このサイズは便利ですね・・・』

「何かアンタから雰囲気得更に神々しくなったんだが・・・」

『主から魔力をもらいましたからね。これからよろしく願いします主』

「ああ、よろしく」

あ、そっだ・・・

「名前、決めないとな。名前、あるのか？」

『ありません。主、名付けをお願いしますか？ちなみに性別は女です』

「オーケーオーケー。さーてどんな名前が良いだろうかねー」

うーん・・・白・・・回復魔法？・・・うん

「レヴィサーナ(Levisana)」

『レヴィサーナ？』

「完璧な造語だけどエスベラント語で活気とかを意味するレヴィグリーギと健康とかを意味するサーナをくっつけた名前だ。気に入らないか？」

『レヴィサーナ・・・良い名です。気に入りました』

「おし、じゃあ相性を込めてレヴィと呼ぶことにする」

『はい。宜しく願いします主』

こうして俺に新しい仲間が出来た

《だがクエストはどうするつもりだ？》

「あ……」

どうしよう……

マースル、冒険ギルド

カランコローン！

「おいユリアー戻ってきたぞー」

俺が戻ると周りがざわつく。

「あーうるせえなー……俺が戻ってきちゃだめなんですかー？」

「おう、兄ちゃんわかってるじゃんか。実際テメエの活躍もデマかと俺達は疑ってたんだよ。しかもSランククエストをたった半日でクリアなんて出来るわけがねえだろう……が……」

男の声がしりすばみしていく

レヴィが俺の方に上ってきたからだ

「おい、レヴィ出てきちゃだめじゃんか」

『すみません、主。ですがあの異次元空間って言うのですか？あそこは好きになれません』

ピ チューみたいだな

「あーそうだな。ちょっと目立つがまあいいか・・・」

「お、オメエそれ・・・」

男が震える指でレヴィをさす

ニヤリと俺は口元を曲げて言う

「ご名答。依頼のドラゴンだ。俺の使い魔に下から討伐じゃなくて捕獲だな」

「つ、使い魔だと!？」

『はい。私は主の使い魔です』

「ば、馬鹿なドラゴンが人間の使い魔に・・・」

男が震えてるとカウンターからユリアの声が聞こえた

「おーユリアただいま」

「アルクさん！クエストの説明も受けな・・・いで・・・」

ユリアも男と同じリアクションをしながらレヴィを指さす

「クエスト完了だ。あ、こいつ俺の使い魔にしたから。報酬はギルドの俺の金庫に入れておいてくれ」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・おーいユリア？」

目の前に手をかざして振ってみるが反応なし

「ど、どうしようか・・・」

《ほっとけばいいのではないか？》

『フェンリルに同意です』

「いや、駄目だろ」

何言ってるでしょうがこの一匹と一本は

ユリアはパクパクとレヴィを指して固まっているので頭に手刀を入れてみる

「うてあ」

ゴツン！

ユリアの頭に手刀を入れる

「痛っ！？」

ユリアは頭を押さえながら俺を恨めしそうに睨む

オレハワルクナイデス

「痛いです・・・」

「すまない。反省はしているが後悔はしてない」

「駄目じゃないですか！！」

ガオー！と吠えるユリア

ちょっと可愛いと思ったのは余談だ

「そんなことより」

「スルーされました・・・」

こっちにもスルーって言葉あるんだ・・・

ちょっとした元の世界とのかぶり度少し癒される俺

「オホン！えっと、依頼のドラゴン使い魔にしちまったけど大丈夫だよな？」

「ドラゴンを使い魔にして帰ってくるなんて……。それにしてもかなり凶暴なドラゴンと聞いていたのですが……」

マジマジとレヴィイを見るユリア

『主、この娘は？』

「ん？ああ、ユリアアっていうんだ。仲良くしてやってくれ」

『ふむ……この娘からは懐かしい感じがするのですが気のせいでしょうか……？』

レヴィイはそう言ってユリアの肩に乗った

「ひゃ！？ア、アルクさくん」

少し涙目になっているユリア。そこまで怖がる必要あるか……？

「大丈夫だ。何か懐かしい感じがするって言って飛び乗っただけだから」

「そ、そうなんですか？」

おそろおそろレヴィイを前に持つてくる

『！主この娘、魔力変換資質を持っています』

「は？魔力変換資質？何でそんなもんが……」

しかもそんなことでそれほど驚くか？

『ただの魔力変換資質ならいいです。ですが……この娘はカイゼル・ファルベの持ち主です』

《カイゼルファルベだと！？》

「お？なんぞ？それ」

またわけわかめな単語が……

《カイゼルファルベはアヴァロンの聖王家にしか発現しない資質だ。それが何故ユリアに……》

「あ、あの〜？」

ユリアは自体について行けずに首をかしげている

「あのさ、ユリア違ったら悪いんだけど。お前って孤児？」

「え？あ、はい……。ギルドマスターに拾われて生活してきました」

成程……ということとはどっかの王家の血筋の奴がユリアを捨てたか逃がしたか……

まあどちらにしてもとりあえずユリアは聖王家の血筋……。これはどうしたもんかねえ……

「（どうするべきだと思う？）」「

念話でフェンリルに相談する

（《私は知られるべきではないと思う。今日会ったばかりだが良い娘だ。権力争い何かに巻き込ませるわけにはいかない》）

『私もそう思います』

だな。よし、じゃあ伝えない方向で

「まあ気にすんな。あ、あとそのこと誰にも言つなよ?。」

一応念押ししておいたけど「人の口に戸はたたず」って言う言葉通り人の口に戸は立てられない
つまりどこから漏れるかわからない。ユリアがすっかりポロリと言ってしまったら終わりだしな

「あ、それと金庫から金貨十枚ぐらい出してくれるか?。」

本当にこの世界はRPGっぽくて金が銅貨、銀貨、金貨の三種類にわかれている

だいたい金貨一枚十万くらいだ

早く、行かないとな……

俺はギョツと拳を握りしめた

エミリアSide

「あ、あああ!!」

『魔力出力を20%上げる』

痛い……!魔力が無理やり私の中に入ってきて……暴れまわ
つてる……!

「痛い……!やめてえ!!!」

子供たちが叫んでる……

「子供たちには何もしないで!!」

『まだ喋れるのか……。魔力をもつ10%上げる』

「ああああああ!!!!!!」

アルク君が来てくれることを絶対信じて私は痛みを耐えた

エミリアSide End

第十四話 最悪の絶望（前書き）

ま、まだまだだぜい・・・

第十四話 最悪の絶望

《主、エミリア達の魔力波長、捉えたぞ》

「っ！本当か!？」

レヴィと契約してから一日が経過していた

あれから二日・・・エミリア達は何されてるかわかんねえ、早くいかねえと！

俺はフェンリルを首に通しす

「行くぞ」

俺は宿屋のおば・・・お姉さんに金を渡してフェンリルが示した場所に駆けだした

《エミリア達の魔力反応があったのはこの山の奥だ》

『この山にはある施設があります。たしか魔力の研究所だとか』

「おいおい何だその怪しさ満々なモノは」

魔力の研究所とかウソはついてないがヤバそうな研究してそうじゃんか

俺は森の木という木を踏み台にしながら駆ける

《もうすぐだ》

「ああ、わかる。この感じ・・・嫌な感じだ」

この奥から流れてくるのは禍々しい「ナニカ」

吐き気がしそうだ・・・!

「突入するぞ!」

《Yes, master!! Stand by ready!!》

『はい!』

魔力変換資質「業火」でフェンリルの刀身に炎を纏わせる

久しぶりに使うな・・・

「零式」

ゴウウウウ!!!!!!

俺の感情に魔力が反応して燃え上がる

「終の奥儀、壱!」ヒテンノミツルキ「火天光祁」

炎の濁流が研究施設に向かって進み施設を消し飛ばした

「ヤバ!? フェ、フェンリル!」

《大丈夫だ。良く見ろ》

俺は研究施設があつた場所を見る。施設の下には魔方陣のようなものが見える

「へえ・・・俺の最終奥儀でも破れない結界ね・・・」

零式は本来日本刀で使う奥儀だから本来の威力は出てないとはいえ威力の部分を魔力でカバーしたのに破れないとな・・・

「燃えるじゃんか・・・!!」

さっさとぶっ壊してエミリア達を連れて帰る・・・!!

「やらせないよ」

「っ!?!ぐあ!?!」

上から声が聞こえたと思つたら腕に何かが刺さつた

「うっ・・・!?!」

ぐらつと視界が揺れる

しまった・・・毒・・・!

ガク!と膝をついて前を見るとそこには赤髪の男が立っていた

しかもその男が持っている刀は・・・

「その剣……斬魂刀……!? お前……!」

「そつだよ。君と同じ転生者。僕の名前は篠崎枢。君と同じ転生者
だけどキミと違って真に選ばれた転生者だよ」

真に……選ばれた?

髪をかき上げ自分カッコイイでしょ? 的な雰囲気振りまいている男

「転生者……が随分……セコイ真似するん……だ……な」

「僕は戦うのが嫌いなんだ。汚れるし痛いしね。だから楽に殺せる
方法をとってるんだよ」

こういうタイプは自分が一番だと思ってる上昇志向タイプ……。
だったら自分に上が居ることをわからせてやれば勝手に自滅する……

「さて、長話をしてる暇はないんだ。生憎とだけどさっさと死んで
もらっよ」

「(フェンリル……!)」

(《わかってる全力でやっているさ》)

元々俺はトリカブトやフグ毒などの毒系に耐性が付いている。だが
この毒は特別な毒なのですぐに解毒できない

そこでフェンリルに手伝ってもらい身体に解毒剤を流しているのだ

もう少しで・・・

俺はゆっくりと力が戻ってくる身体に焦りを覚える。だが次の言葉で

「さて、実験がそろそろ終わるんでね。すぐに終わらせてもらおうよ」

実験・・・？

「まさか・・・」

ドクン・・・！！

俺は手をつきゆっくりと立ち上がる

「なっ！？お前毒が効いてるんじゃない！」

「お前たちエミリア達に何をした・・・」

ドクン・・・！

「エミリア・・・？ああ、あの実験動物ね。黒騎士計画のモルモットになってるんだよ。おかしいよね。ひっきりなしに君の名前を呼んでいたよ「アルク君、アルク君・・・」！」「てね」

可笑しそうに言った。本当におかしいと言った風に

ブツン・・・

自生してきた何か切れた気がした

「……………ツツツ!!!!!!!!!!!!!!」

殺す!!!!!!!!!!!!!!

ドゴオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!!!

俺の魔力が視認できるほど放出する。魔力光のせいで禍々しく見える色がさらに禍々しく見えた

「ひっ!?!」

「殺すツツ!!!!!!!!!!!!!!」

フエンリルを握り直し感情の赴くまま駆ける

「ハアアアア!!!!!!!!!!!!!!」

「ぐっ!?!」

ドゴオ!!!!!!!!!!

篠崎が俺の攻撃を受け止めるが地面が陥没する

「ああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

《主! 止まれ!》

「うるせえッ!!!!!!!!!!コイツはコイツだけはアアアアア!!!!!!!!!!!!!!」

無詠唱でブラッディダガーを数十以上出現させる

「ブラッディダガー！！！！！！！！！！」

「う、うわあああああ！！！！！！！！！！」

ズガガガガガガ！！！！！！！！！！

ツドオオオオオオオオン！！！！！！！！！！

一発一発にSランク以上の魔力を込めたから一発がめり込み、大爆発を起こした

「う、ぐ・・・！！」

爆風で吹き飛ばされてダメージを負ったが脱出しようとする篠崎。俺はそれを見て更に怒りを激しくする

「逃がすかああアア！！！！！！！！！！」

フェンリルを逆手に持ち直し追撃する

《主、止まれ》

フェンリルは自分で待機状態になった

「フェンリル！？何で！！！！！！！！！！」

こいつはエミリア達をエミリアを！！！！！！！！！！

そう言おうとしたが興奮しすぎて言葉にならない

《今の主ではエミリアを救えないぞ！》

「何言ってるんだよ！！コイツをこいつらを消し飛ばせば良いだけの話だろうが！！！」

パシンン！！！！

いつの間にか現れていた白い髪の女が俺の顔をはたく

「見損ないました主」

「お、お前・・・レヴィ・・・か？」

白い髪に金の瞳。ドラゴンの状態を人にしたような姿。まさしくレヴィだ

「主はむやみに人を殺すような人だったのでですか？今の顔を見てください。唯の殺人鬼の顔になっています。何の覚悟もできていないような殺人鬼に」

俺は近くに会った水たまりに俺の顔を映した

醜い顔だった。酷い顔だ・・・

いいか啓。私達の剣術は人を簡単に殺せる技術だ。だからこそ殺意に飲まれず意識を律さなければならぬ。わかるな？

師匠・・・危うく俺はただの人殺しになり下がるところでした・・・

ありがとう……

「もう大丈夫だサンキューな」

俺はレヴィの肩から顔をどかしながら言った

すっげえ恥ずかしいなこれ……

「さ、さあ行きやしょうか!」

《言葉がおかしくなっているぞ》

「そ、そそそそんなことないで!」

「クス」

はっ!

お、落ち着け深呼吸だ!

ヒッヒフー、ヒッヒフー

《それは深呼吸ではなく出産の時の呼吸だな》

「はっ！」

「主、落ち着いてください。私は気にしてませんから」

「わ、悪い……」

……よし落ち着いた

「おし、改めていくか！！！」

俺はこの時知らなかった。俺の運命はすでに絶望への一歩を進み始めていたということ

第三者 Side

灯りが何かの機会のパネルの光しかない広い空間で二つの人影があった

「気分はどうだ？」

「上々ですマスター」

その空間には何かの機会の光しかない暗闇の空間だった

そしてその光で照らされた顔は

「頑張ってくれよ私の最高傑作」「エミリア」「

エミリアだった

第十五話 立ちはだかる最強の敵（前書き）

やけくそだ！こらあ！

第十五話 立ちはだかる最強の敵

「さっきは邪魔されたが一気に叩つ斬る!!!」

《息巻いているところに悪いが主、朗報だ》

「おろ?」

何だよ人がせつかくやる気を出しているっていうのに・・・

《カードリッジシステムは知っているか?》

「・・・なんぞ?」

《カードリッジシステムというのは魔力を込められたカードリッジをロード、つまり排出して一時的に魔力を限界異常に引き出すシステムの事だ。何故かはわからないが今まで封印されていたがたつた今解禁された》

「おお!すげえ!」

ということは今この技の威力が上がるってことか!!

《だが使いすぎも良くない。このシステムはまだまだ技術が安定していないくてな。使いすぎると身体にダメージを負わせることになる》

「何にもリスクはつきものか・・・」

いや、今は気にしてる暇はないか・・・!

「フェンリル、カートリッジロード！」

《Load Cartridge!!》

ガシユン×2

カートリッジが二つ排出され地面に転がる。

コオオ・・・

「こりゃあすげえ・・・」

身体から魔力があふれ出てくる！

「レヴィ悪いが俺だけじゃ無理だろうから力、貸してくれ」

「わかりました」

レヴィは頷いて魔力を固め始める相変わらずすげえ魔力だな・・・

「さあ、こつちも始めるか!!」

今までの戦いでわかったことだが俺は手からの魔力生成は才能が無いみたいだ。武器を通してのほうが魔力を放出しやすい

「集え」

ゴウウウ!!! フェンリルの刀身に炎が集って行き、牙を形作る

「塵は塵に灰は灰に！炎よ集え！一の牙となりて敵を蹂躪せよ！！」
零式亜流ノ太刀

「炎牙一閃！！！！！！」

地面にフェンリルを叩き付けると龍の牙のような形をした炎が飛び
結界にぶつかる

「行きなさい！！！！」

それと同時にレヴィが放った火炎弾もぶつかる

ツドオオオオオオン！！！！！！！！！！

物凄い轟音と砂煙が立ち上って俺達の視界を一時的にふさぐ

「っはあ！っはあ！・・・ふうーこれでどうよ」

「私もかなり本気で放ちましたし結界は破壊出来たかと」

《お前たちの馬鹿魔力攻撃のおかげでサーチが使えないから私でも
わからないぞ》

そりゃあえろーすんません

っていうかフェンリルのサーチまで使えなくするとかどんだけジャ
ミング強かったんだよ

砂煙がだんだん消えてきた見えてきた研究施設の結界は・・・

「嘘だろ……」

「破壊できていない……?」

《馬鹿な……》

見えてきた施設の決壊は壊れていなくて、しかもその前に立っているのは……

「エミリア……!?!」

ゴゴ……ン雲行きが怪しくなり遠くで雷の音が聞こえた

「何でお前が……」

俺が茫然としてるとエミリアは顔を上げる。その顔は何かの痕が走っていて禍々しい

「リアクト」

《離れる主、レヴィー!!!》

「っ!!!?!?!?!」

「くっ!!!」

何かを腕に刺した瞬間エミリアの魔力が違和感に変わる

「何だよアレ!？」

「わかりませんが・・・何か嫌な気配が・・・」

《あれはECだ・・・》

「EC？」

《エクリプスウイルス・・・。魔導師・・・いや魔力を扱うモノにとっては天敵になるモノだ!》

天敵・・・?どういう　っ!?

「デバイダー999「ハーデイス」セットアップ・・・」

《Start Up》

《主、戦いながら出構わん!良く聞け!エクリプスは魔力を分解する!つまり魔力での戦闘は今のエミリアには効かない!》

銃剣のデバイス・・・!

エミリアは銃剣型のデバイスをこっちに向け何かを呟いている

《つまり・・・実剣や実銃などで戦わなければならない・・・》

「シルバーバレットセット・・・」

《Silver Bullet Set》

銀の魔力弾・・・エミリアの魔力光は赤だぞ!?

「ファイア」

《Fire!!》

「主!」

レヴィが前に出て防御を張るが

《馬鹿者!私の話を聞いてなかったのか!?今のエミリアの攻撃は魔力を分解する!魔法は消されるぞ!》

エミリアの放った魔力弾は防御魔法をつきぬけて俺達に向かって来る

「フェンリル!それはデバイスも役に立たないのか!?!」

《それは大丈夫だ!魔法攻撃が効かないだけでデバイスでの攻撃は可能だ!》

ならっ!

俺はレヴィの前に出て魔力弾を真っ二つにした

「レヴィ!施設へ行け!!!今回はお前は役に立たない!」

「ですが・・・！」

「せっかく手に入れた相方をここで失うわけにはいかないだよ！それよりお前はあの施設にいる生きている人たちの事を頼む！可能性は低いが生きてう人もいるかもしれねえ！！」

俺はエミリアの攻撃を防ぎながらレヴィに言った

何にしる魔法での攻撃が出来ないとかなり厄介だな・・・

「わかりました。施設の生存者については私が」

「頼んだ！」

レヴィが走り出すとエミリアが前を塞ぎ攻撃を放つ

「行かせない」

「やらせねえ！！」

それをフェンリルで防御する

「行け！」

「（コク！）」

行ったか・・・。

俺はエミリアの攻撃を受け続けて若干震えてる右手を見る

一発一発がとんでもねえな・・・！これじゃあ何時までもつか・・・！
・・・やっぱり気絶しかねえか・・・。今のエミリアの状態
を気絶で沈められるかどうか・・・

「ま、やってみるしかねえってことだな」

フェンリルを構え俺は口の端を曲げた

第十六話 逃亡(前書き)

そ、そろそろ・・・げ、限界・・・

第十六話 逃亡

「っせああ!!」

「ハア!!」

俺とエミリアの攻撃がぶつかる

実力は互角!ならあとは・・・

「っせ!!」

「っ!!?」

経験がものを言う!!

「だああ!!」

「グフ!?!」

俺はデバイスを右手で跳ね上げガラ空きになった懐を殴り飛ばす

やっぱり体術の方はさっぱりか・・・これなら行けるか?

「かつ!がはっ!!」

エミリアは起き上がるうとするが

「無駄だ。今の一撃には気を混ぜてお前の運動神経系を一時的にマ

ヒさせた。しばらくは立てねえよ」

体術、「神気拳」。手に気を通すことで相手の体に使い手の気を流す技。気って言うのはいわば本人の生命エネルギー。でも人にはそれぞれ違うエネルギーが流れている。たとえば・・・輸血の時に違う型の血液は輸血出来ないのと同じで気って言うのは人それぞれ違う。

血液と違うところは型が一緒って言うのはあり得ないことだ。どれだけ同じに見えてもどこか違う場所がある。なのでその型があわないエネルギーを流されると流された部分がマヒする

俺はそれをエミリアの運動神経系に流すことで行動をマヒさせたわけだ

「！」

「あ？」

何今言わなかったか？何以下猛烈に嫌な予感がするんだが・・・

《離れる主い！！！！！！》

「なっ　　！？」

「デイドロゼロ　　」

《Divid Zero”Eclips”！！！！》

「エクリプス！！！！」

ドクン！！！

「ガハツ！！！！？？？」

何だこの感覚！！？？

俺はドシャ！と前に倒れる

「ぐっガハツ！！」

ビシャビシャ！！！！

俺は地面に吐血した。

今の・・・感覚・・・何か大事な部分を破壊されるような・・・

《今のは分解攻撃だ》

「ぶん・・・かい・・・攻撃？」

《EC細菌感染者は殺気も言った通り魔力を分解する・・・。それを相手の生命活動にかける技だ。だがそれは極めて困難なことだ！それを何故・・・？》

「それ・・・だけエミリアは・・・特別だった・・・てことだろう・・・」

フェンリルを突き立てて立ち上がる

メチャクチャ苦しい……生命活動を分解されるってことは間接的に殺すってことだ……

こんな技を何発も連発されたら死ぬ……!

《主は褒められるべきだな。アレを喰らっても吐血程度で済むとは……》

「咄嗟に……気を体に流して……生命活動を活発化させた」

《もはや天性の才能だな……。咄嗟にそんなことができるとは……》

「フェンリル……あれは何発も連続で使えるのか……?」

《魔力が続く限りは使える……。だがあの技は魔力をかなり消費するはずだ……。そうそう何度も使える技じゃない》

「それは……。嬉しいな。あんなのを何発も喰らったら死んじまうからな……!」

だんだんと身体に活力が戻ってきた。だが回復に気を使ったせいで気だるさが出始めてる……。俺の気力は膨大だ……。それをここまで消耗させるなんてな……

「ヤバイかもな……」

エミリアがあんな風になっちまったのは多分間に合わなかったからだろうな

「フェンリル、まずエミリアを正気に戻すぞ」

《わかってる。だが方法が・・・》

「何かないのかよ・・・。精神ダイブとか」

《そんな都合がいいものなんてないぞ》

肝心なところで役に立たねえ!!

《悪かったな》

「いや、こつちこそすまん・・・。俺がふがないせいだって言うのに・・・」

ヤベエな焦ってきてるのか・・・。落ち着け落ち着け・・・

考える・・・あまり時間が無い・・・。痛みで目が覚ませるか？

いや、そんなんで覚ませるならさっきの懐への一撃で十分だと思うんだが・・・

「シ、ルバーバレット・・・!!」

エミリアがデバイスを構えて俺に向ける

《ま、まずいぞ主!!》

「嘘だろ!?! 運動神経系をマヒさせて痛みで朦朧してるはずなのに!?!」

まわりに紙の紙片がまき散らされる

しかもデバイスの刃先にとんでもない量の魔力が圧縮された魔力弾が生成されていく

「何をする気だ・・・？」

《嫌な予感しかしないぞ、私は・・・》

《Silver Stars Hundred Million》

ポオウ・・・

「はい？」

《なっ・・・！？》

何だよあの数・・・！？

「ファイ、アー・・・！！」

キユゴオオオ！！！！

《主！アレ自体は単純なエネルギー弾だ！防御もできる！》

「ちくしょお・・・！！」

《Protection！！》

万事休すか……！

《エミリア……！眼を覚ませ！お前は！》

「ぐっ……エミ……リア……！」

俺も声をかけるがエミリアは反応すらない

チャキ！

「排除する……」

エミリアがデバイスを振り上げ構える。もちろん殺傷設定

くっ……！！

「はぁ！」

「主……！」

俺とエミリアの間に魔力弾が爆発する

「くっ！」

エミリアは一旦離れたところに男と子供数人を担いだレヴィが走ってきた

「主、ご無事ですか！？」

「ああ、なん……とかな……」

《レヴィ、助かったぞ……》

「ええ……。生存者を発見しました。主、ここは一旦引きましょ
う。分が悪いです」

「ああ……!!」

エミリアはすぐ目の前に居るのに……!!

「転移魔法を発動します!」

俺はレヴィの転移魔法でそこを離れた

第三者Side

「逃げましたか……」

エミリアはデイバイダーを下げる。

後ろに白衣の男が現れた

「エミリア」

「マスター……。すみません取り逃がしました」

「いい。あの男は少し泳がず。それよりすこしお前の調整をしなければな」

「イエス、マスター」

エミリアと白衣の男はどこかに転移した

第十七話 追憶（前書き）

あともうひとつ！

第十七話 追憶

「スー……」

「主は寝てしまわれましたか……」

私は主を寝具に寝かせて差し上げる

強かった……。能力だけじゃない。主だから体術だけで圧倒は出来たが私ではあのエミリアとかいう人間に勝てなかった

龍の中でも最強と歌われた古代龍の長たる私……。たかが魔力を使えなくされてだけで……！

「強くならねばなりませんね……！」

強く……！

レヴィサーナSide End

フエンリルSide

レヴィが去った後私はひとりでに起動して私の内部について徹底的に調べ上げた

カートリッジシステムが何故今ごろ解禁されたのか……。しかも私の覚えが無い機能まで追加されている

《やはりアテナの仕業だろうか……。？だがアイツ以外に私を変更

させることが・・・》

いや、そんなことよりも・・・。

《EC細菌が出てくるとはな……。昨日死ななかったのは主の体術あつてこそだな》

だがエミリアがあそこまで魔力運用に長けていたとは……。思えばエミリアは私達の前で魔法を使ったのは一度しかない。その時も大した魔法も使っていなかったから実力というモノを把握できていなかった・・・。

いや、これは唯の言い訳だな……。神剣として……。いまはデバイスとして主を守り、支えるのが私達の使命……。

ならば今一度私の調べ上げねばなるまい

私は自分自身に徹底的にスキャンをかけた

フェンリルSide End

「うつ・・・。」

目を覚ますと見覚えのない天井だった

「ここは……。っ、身体がだるい・・・。」

窓の外を見ると日が出ていた。エミリアとあつたのはもう日が暮れ

るぐらい・・・ということは一日たったわけか・・・

このたるさも魔力と気を限界まで使った所為だな・・・

そう考えていると部屋のドアが開いた

「主、起きられたのですか」

「ああ。昨日は助かった」

「いえ、使い魔として当然です」

「そうか・・・。何か買ってきたのか？」

レヴィは手に紙袋を持っていた。買ってきただろう食材が覗いている

「はい？あ、これですか？はい、申し訳ないと思っただのですが主が起きられた時何かお食べにならないと思ひまして」

「まったく気がきく使い魔なこと・・・」

俺はたるさを我慢して身体を起こしレヴィの横に立った

「やるから寝てるよ」

俺はレヴィから包丁を取り上げた

「あ、主寝てらっしゃらないと！」

「大丈夫だよ。傷も大分癒えた。回復魔法、かけてくれたのレヴィ

なんだろ？お前も疲れてる筈だ。食事なんかは自分で作るから少し寝てるよ」

「ですが・・・っ」

レヴィが言おうとしたがふらつき俺に抱きかかえられる

「ほれ、言わんこっちゃない」

「す、すみません・・・」

レヴィを膝から抱える

まあ俗に言ってお姫様だっこという奴だ

「あ、主！？／＼／」

「いいから」

俺はレヴィを俺が寝ていたベッドに寝かせた

レヴィの顔は少し赤くて少し色っぽかった

って何を考えている俺は！？疲れでとうとう頭が可笑しくなったか！？？

「すみません主・・・」

「謝んな。使い魔の事を考えるのも主の役目、だろ？」

「はい……。では少しだけ……眠らせていただきます」

「ああ、おやすみ」

レヴィは目をつぶってすぐに寝息を立て始める

少しの間顔を見てたら土が付いているのを見つけた。違和感を感じていると所々にも土が付いているのを見つけた

「何で土なんか……」

《特訓だよ》

「っ！？フェンリル、お前起きてたのか」

首から声がかかったので目の前に掲げる

すると赤のネックレスは光りながら答えた

《レヴィは朝早くから今さっきまで特訓をしていたんだよ。エミリアとの戦いで役に立てなかったのがよっぽど悔しかったんだろうな》

「別にそんなの気にしてねえのにな……」

《レヴィにもプライドというモノがある。ましてや龍の中でも最強クラスの龍、古代龍がたかだか魔力を使えなくされたぐらいで役に立たなかったなど》

「……ハイ？」

龍の中でも最強クラス？レヴィが？

俺そんな奴と契約したのか？

「大丈夫なのかそれ？」

《知らん。だがレヴィが了承したと言っただいじょうぶなのだろ
う》

どっちだよ

《だからわからんと言っているだろうが》

「心を読まれた!？」

《何を今さら。私のデフォルト機能だぞ？》

「はじめて聞きましたよ!!??？」

あー頭痛がしてきた……。あ、それよか何か早く作るか……

えーっと何を買ってきたんだー？トマトとニンジン……

俺は料理を進めた

レヴィサーナSide

トントン……

「んっ……」

良い匂いですね・・・

目を開けるとキッチンで主が料理をしていた

「おっ起きたか」

「すみません主・・・」

「疲れてたんだな。もう夜だぞ」

主の言葉に目を見開き、私は急いでベッドの近くにある窓にかけてあったカーテンを開くと満天の星空と月が輝いていた

「今日は綺麗な星空だ・・・明日は晴れるな」

「そう・・・ですね」

「晩飯、そろそろ出来るからこっち来いよー」

「はい」

夜まで寝てたのですか・・・。自分自身でも気付かぬうちにかなり疲れていたようですね・・・

「レヴィー出来たぞー」

「今行きます！」

テーブルについて出来た料理を見る

「主・・・料理が出来たのですか？」

目の前に並んでいるのは肉料理。しかも中洋両風の料理だ

ちなみに私は知識として料理があるので一応何でも作れるが主は人間だ。勝手に知識なんて備わってこない。なのに・・・

「死ぬ前は自分で飯を作ってたからな。これくらいは出来たぞ」

《コイツの彼女は悔しがっていたがな》

ガタン！？主が椅子から落ちた

「あ、主？」

「だ、大丈夫だ・・・。それより・・・」

主は首からフェンリルをとってテーブルに叩き付ける

「何でそれ知ってる！！！？？」

《乱暴に扱うな》

「黙らっしやい！とにかく理由を簡潔にまとめろ！！」

「私は使い手の記憶を垣間見ることがたまにあるのだ。それで覗かせてもらった《

「簡潔だがプライバシー侵害だぞ！？」

《人の法は私には適用されない》

「ちくしょう……」

主は項垂れて晩御飯を食べ始めた

私も一口頂く

っ！これは……！！

「おいしいです主ー！」

「お、おう。そんなにおいしかったか？」

？何故そんなに身体を反らしているのですか？

(A・レヴィの顔が近すぎるから)

「はい この肉料理つまつまです」

「つまつまって……」

《ちょっと死語っぽいな……》

つまつま……

「レヴィは肉料理が好きなんだな」

《龍だからじゃないのか？》

二人がこんな話をしていたのに気付かないほど私は料理に集中して
いました

レヴィサーナSide End

「っせあ！らあ！だっ！」

ヒュ ガガガガ！！

零式一ノ太刀！

「閃花ア！」

ズバア！

気が二つに分かれ瞬時に新しいのが置かれる

零式二ノ太刀！

「絶牙！」

ガガガガ！！

木がボコボコになってまた新しいのが置かれる

零式三ノ太刀！

「龍槌閃！！！」

ドオオン！

上段からのとてつもない斬撃に木が一瞬で碎かれる

「はあっ！はあっ！まだっ・・・まだあ！！！」

零式終ノ太刀 壱！

「火天光禊！！！」

ツドオオオオオオオオン！！！！！！

炎の柱が雲に向かって伸びる

終ノ太刀 弐！

「天衝龍牙！！！！！」

気で生成した莫大なエネルギーを龍の形にして上空に向けて放つ！！！！

オオオオオオオオオオオオン！！！！！！

終ノ太刀 終幕！！

「無月！！！！！」

魔力で生成した斬撃をただ放つだけ。だがこの威力は莫大なエネルギーをそのまま放つためとんでもない威力を発揮する

上空にはなつた斬撃は数十キロ以上飛び続けた。しかも威力を失わずに

「はあっ！はあっ！はあっ！」

まだ完全に回復してないのか・・・！エミリアの攻撃だけでも気と魔力が奪われてた・・・。

EC細菌感染者って言うのは攻撃で相手の魔力とかを減らせるのかよ・・・。

息を整えながら地面に仰向けに寝転がった

「綺麗な星だなー」

ここは地球みたいに余計な灯りがないから夜空が凄く綺麗だ。

ねえ、啓？星の光ってすごいよね。何万光年も離れててもこうして見える。時間はかかるかもしれないけどちゃんと見えてるんだよ？

「・・・・・・・・」

夜空をバツクにしながらあいつは笑ってた・・・。あのとき俺達は確かに幸せだった

だからね、啓。もし貴方が私を見失っても私が輝くから絶対いつか私を見つけてね？

「あるとき……俺は何て言ったんだっけか……？」

いや、わかりきったことだな……

俺は苦笑しながら思った

ぜってえ見つけてやるよ、多分そう言ったんだと思う

ここはどこかもわからない世界。すぐ近くにあっても凄く遠いそんな曖昧な世界

「啓……私はここだよ……早く助けに来て……」

少女は涙を流しながら少年の助けを待つ

第十八話 運命の出会いと再会（前書き）

まだ・・・いける！

第十八話 運命の出会いと再会

あれから数日たった。実はレヴィと特訓することになった。何故かいきなり体術を教えてください！と言われてびっくりしたがまあ別に教えたくないわけなので特訓はすぐに行われることになった

「ほれ、腰の使い方が甘い！」

俺は拳を突き出してきたレヴィの右手を掴み投げる

「くっ！」

レヴィは手をつきながら着地して受け身をとる

「身体能力自体は悪かねえんだからよ、もうちっと身体を使い。もうちょっと考えるより動け」

「は、はい」

俺は駆けだしながら拳を構えて放つ

「せっ！」

「っ！」

レヴィは俺の拳を反らして右足で蹴りを放つ。

「っ！」

レヴィの足を視点に手を置いて逆に上段蹴りをレヴィに繰り出す

「くっ！」

「お？」

蹴り出した左足を掴まれ前にひかれ待つ先には・・・

「スー・・・！」

魔力を溜めたレヴィの右拳

「や、ヤベ！？」

「ハアアア！！」

ズドン！

レヴィの拳が俺のどてっ腹にぶち込まれる。瞬間的に腹に鈍い鈍痛が走る

「ぐっ！？」

「ハアアアアア！！」

俺はレヴィの拳で吹き飛ばされた

「や、やった・・・？」

茫然と自分の手を見ながらつぶやくレヴィ

「いてててて……」

俺は腹をさえながら立ち上がった

いたたた……鈍い痛みが……

「あ、主！？す、すみません！大丈夫ですか？」

「ああ。大丈夫……」

しっかし今のは凄かったな……。何か炎がボウ！と燃えて見えたが俺の気の所為か？

《気の所為じゃないぞ》

「……マジですか？」

相棒の言葉に俺は肝が冷えるのを感じた

いや、炎何かモロに受けたら火だるまになるでしょ

《私がむざむざ主をそんな目に合わせるわけないだろう。当たる瞬間に霧散させた》

「改めて俺の相棒がチートだと言うことを自覚した」

いや、魔力を霧散させたとか……

《無意識下の魔法行使で単純な術式だったからだ。もっと複雑で意

識下だったら今ごろ主の体は全身火だるまだろうな》

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あ、主！？汗が大量に出っていますが大丈夫ですか！？」

「い、いやダイジョウブだよ？なんかもうしにそうだったとかかんがえてたらしぜんにねあははいやもうやだ」

《息継ぎなしでよく言えたな》

「ちよつと自分でもすごいと思つてたりした」

こんな感じで今日の特訓は終わった

そう言えば研究所から救出したのは親父さんではなかった。研究所の研究员でしぼりあげたらまあデータの居所や、残る研究所の場所やら吐きに吐いた。

多分研究员の中でも結構トップの方の奴だったんだろうな。あ、もちろん記憶消して魔法封印して魔獣がめちゃくちゃ出没する森に放りだしておいた

「子供たちが先だな・・・・・・・・」

「そうですね……。何をされているかわかりませんから」

《研究員の話だと子供たちの方はかなり後回しにされているみたいらしい。エミリアの方が成功する可能性が高いんだそうだ》

「おし、さぁ子供たちを救出しに行きますか！！」

「はい！」

《うむ》

とある研究所 Side

「被検体達の方はどうだ？」

「01〜05まで安定しています。流石成功体の関係者ですね。まさかとは思っていましたがここまでとは・・・」

「我々管理局の生涯最強の駒と鳴るべき存在だ。丁重に扱えよ」

「了解です」

とある研究所 Side End

「ここか・・・」

「また森の奥なんですね」

《かなり陰湿な研究だからな。陰湿な場所が好きなんだろう》

「多分な。フェンリルセットアップ」

《Stand by ready!!》

フェンリルがキーン！と瞬時にネックレスから剣に変わる。

うし、準備完了

研究所に向かって歩き出そうとした瞬間

《っ！この魔力反応　　！！》

「上!?!」

「離れますよ主!」

瞬時に俺達はその場所から飛び退いて武器を構え

「っ!」

《Protection》

炎の濁流が敵に襲いかかる　　が

シュウウウ・・・

俺の魔法は敵に当たる直前に霧散して消えてしまった

「おいおい霧散したってことは・・・」

「まさか・・・」

「・・・」

武器を構え、全体が黒で統一された少年少女が現れた

「遅かったのかよ・・・」

俺は茫然と武器を構えるエルザ達を見た

「そんな・・・」

《管理局共め・・・！！！！》

とりあえずエルザ達の正気を取り戻す。黒騎士になった人間の正気の取り戻し方はコアを破壊すること

コアは黒騎士の中枢を司っていてそれを破壊することで黒騎士を破壊できるらしい

「仕方ない！魔力ダメージで中枢を破壊する」

「はい！」

俺達が駆けだすのと同時に子供たちも駆けだしてくる

「……………!!!!」

「甘エ!!」

拳の突き出し方を見て俺はやっぱりなと笑う

一人ひとりの戦闘経験が浅い所為で戦闘能力が弱い

「はっ!!」

胸の中央にフェンリルを突き立て中枢を破壊して倒れてきた子供を抱えて後ろに飛び退き近くにあつた木に寝かせておく

「あと五人……………!!」

《戦闘能力が小さいからといって油断するなよ》

「了解だ!!」

レヴィサーナSide

「それにしても……………」

子供の攻撃をいなしながら考える

なんとも胸糞悪い話ですね……………。そこまで自分の力を誇示したい

のですか・・・！

「こんな子供まで使って・・・！」

子供の一人を手刀で気絶させ横たわらせる

「あと・・・四人ですか」

今さらですが子供を傷つけるのは正直言って気が進まないのですが・
・

「やるしかありませんね」

向かって来る子供を見て私は構える

レヴィサーナSide End

「ったく！」

ギーン！

俺はデイバイダーでの攻撃をフェンリルで受け止める

《主、右だ！》

「うおっと！？」

顔を右に傾けると銀の魔力弾が通り過ぎる

こ、こええ・・・

「殺傷設定だとやっぱ怖いわな」

《呑気に言ってる場合か！ 囲まれたぞ！》

周りを見ると三人が俺を囲んで魔力弾を構えていた

「シュート・・・」

っ！

ドオオオオン！！！！

魔力弾が撃たれ俺が居た場所は砂煙でふさがれた

「・・・・・・・・」

チャツ・・・

エルザ達はディバイダーをさげたが甘い！

「請うは天縛りし鎖・・・！グレイプニル！！」

ジャラララ！ジャラララ！！

四方八方から鎖が伸びてきてエルザ達を拘束した

「ブラッディダガー！！！！」

ジャキジャキジャキ！！

「発射」

《Fire》

ドストドス！！

正確に五人の胸に撃ちこまれ中枢を破壊した

「終了と・・・」

《存外苦戦したな》

フエンリルがボソツと呟く。俺はその言葉に苦笑しながら頷く

「まだ俺も自分の力を十分に扱い切れてるわけじゃないからな・・・」

「

まだ少し人外の身体能力に振り回されてる感じがする。前の世界でも人外な身体能力をしてたけどここまでは酷くなかった

「少し出力が激しすぎるんだよな・・・」

《鍛錬あるのみだな》

「おっしやる通りで」

俺はそう言いながら研究移設に入って行った

中は酷いことになっていた。何か胎児のような人。脳のようなものが水の中に浮かんでいる

「くそ気持ち悪い場所だな・・・」

《EC感染者はうまく適合しないとその脳のようなものになり果てる。この脳のようなものはEC感染者のなれの果てだ》

「ってことはこれ全部が・・・！」

部屋中のほとんどを占領するほどの水槽。こんなに犠牲者を出してまで・・・！

俺は犠牲者の一つがたまたま目に入った

ドクン、ドクン

脈動してる・・・？

「生きてるのか・・・！？」

《・・・のようだな・・・。実験材料なのだろう。殺してはもったいないということだろうな》

「くさってるな・・・」

今楽にしてやるよ・・・

「…………ハア!!!!」

炎を纏わせた魔力の斬撃

炎が水槽をどンドン破壊して行って中のものも消えていく

「…………これでよし」

《安らかにな……》

俺達はさらに奥に進む

ふと違和感を感じて扉の前で俺は立ち止まった

助けて!!!

ドクン!

「うつ!?!」

突然大きな声が聞こえ右目に激痛が走る

俺はよろめいて壁に寄りかかる

《主!?!》

「念……話……?」

助けて!!

さらに大きな声で叫んでいる

これは女の子の声か・・・？

「誰か・・・いるのか・・・？」

いるとしたら研究員しかいないはず・・・。何故女の子の声が・・・

右目から血を流しながら俺はさらに奥へと進んだ

レヴィサーナSide

「う、ううん・・・」

子供の一人が目を覚ました

「大丈夫ですか？」

「貴方は誰ですか・・・？」

紅い髪の女の子が首をかしげる

「私はレヴィサーナと言います。貴方は？」

「私はエルザ・・・ここは・・・っ！」

女の子は跳ね起きて施設の方を見る

「アルクさんは!?!」

「アルクさん?」

主の事でしょうか……?

「あそこにはリリイが……!」

「リリイ……?まだ誰か捕まっているのですか!?!」

「はい……でもあそこには魔導兵器が……!」

女の子は立ち上がろうとしますが傷が痛むのか顔をしかめる

「まだ無理をはいけません。非殺傷設定だとしても万能ではありません身体にダメージが残っているはずです」

「大……丈夫……!」

「駄目です。主なら大丈夫です。あの方はこの世界では最強と言ってもいいでしょうから」

「主……?レヴィサーナさんはアルクさんの使い魔なんですか?」

エルザは紅い目で私を見ながら聞く

「はい。そうですよ。だからこそわかるのです。あの方は多分全世界で最強に立っているお方です」

「……そう……ですね。アルクさんなら大丈夫……ですよ」

「はい。だから今は眠りなさい」

「はい……。アルクさん……。リリイちゃんの事頼みますよ……」

「エルザは最後にそう呟きながら眠ってしまいました」

「……。やはり念話が通じない」

主……。無事で……

私は施設の方を見やりながらそう願った

レヴィサーナSide End

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3384v/>

新異世界旅しちやいまーす!!!

2011年11月16日20時08分発行